

積み重ねてきた人類の叡智を学ぶ



神戸大学大学院 人文学研究科
KOBE UNIVERSITY Graduate School of Humanities
2025

神戸で探求する。 人文学を探究する。



Graduate School of Humanities, Kobe University 2025

Contents

人文学研究科長からのメッセージ	1
人文学研究科とはなにか 教育システム アドミッションポリシー	2
人文学研究科の構成 学修プロセス 教育研究分野の紹介	3
人文学推進インスティテュート 地域連携センター 倫理創成プロジェクト	4
日本語日本文化教育プログラム 神戸雰囲気学研究所（KOIAS） 文化交渉学研究プロジェクト	26
キャリアパス	27
人文学研究科の現状	29
人文学研究科の沿革	30
在学生の声	31
	32
	33
	36
	39
	40



Message

人文学研究科長からのメッセージ

神戸大学文学部の前身である文理学部は、今から三四半世紀前の第二次世界大戦後まもなく、1949年に設置されました。その第一回入学案内は、「応用的学問、職業的学問をもっぱら重視し、基礎的な学問の探求、それを通じて養われる科学的精神の育成という面を軽視してきた弊」が「敗戦後の今日においても依然として根強く学界、教育界を支配している」とし、「科学的精神を身につけた健全な市民を育成することが最も急務である」と述べ、人文学の重要性を主張しています。

この理念のもと、1968年には文学研究科修士課程が、1979年には博士課程のみの文化学研究科が設置されました。さらに2007年には文学研究科および文化学研究科を改組して人文学研究科（博士課程前期課程・後期課程）を設置し、学部－博士課程前期課程－後期課程という継続した教育体制を確立しました。

人文学は、人間とは何かという根源的な問いを土台に、人間が生み出してきた歴史や文化や社会について深く考え、明らかにしていこうとする学問です。科学技術が日々発展し、生活のあり方が大きく変化するとしても、人間が人間である限り、人間のあり方を問う基礎科学としての人文学の役割はますます重要なものとなっています。

人文学研究科では、哲学、倫理学、国文学、中国・韓国文学、英米文学、ヨーロッパ文学、日本史学、東洋史学、西洋史学、心理学、言語学、芸術学、社会学、美術史学、地理学といったディシプリンに基づく教育研究を大切にしつつ、同時に、既存の学問の枠を超えた「人文学推進インスティテュート」（「地域連携センター」、「倫理創成プロジェクト」、「日本語日本文化教育プログラム」、「神戸雰囲気学研究所」、「文化交渉学研究プロジェクト」）において分野横断的な教育研究を行い、古典的な学問の基盤の上に、現代的な課題に果敢に取り組んでいます。

人文学研究科はまた、大学間協定、部局間協定に基づく諸大学との間をはじめ、国際的な学術交流も積極的に進めています。

このように人文学研究科は、人類の叡智の蓄積としての古典と現代の問題を結びつけて考えながら、広く人間について考えるという人文学的営為を展開しています。「人文学諸分野に関心を持ち、既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、追究していく情熱を持っている人」、「研究者としての自覚をそなえ、自らの学術研究を学際的かつ国際的な幅広い視野のなかで展開していく意欲を持っている人」（「人文学研究科アドミッションポリシー」より）である皆さんと、ともに学ぶことを心から楽しみにしています。

人文学研究科長

白鳥 義彦

人文学研究科とはなにか

人文学とはなにか

人文学は、人類のたどった歴史の中で、古典として蓄積された知的体系あるいは行動様式を解明するとともに、理想の人間像を実現するための倫理や社会規範のあり方を追求する学問分野の総体です。

現代社会における人文学

現代社会のシステムは、グローバル化と科学技術の急速な進展のなかで巨大な転換を遂げつつあります。価値規範の動揺とアイデンティティの喪失という問題に対応し、地域社会の変容にふさわしい新たな社会規範を創成する人材が求められています。

人文学研究科の目標

人文学研究科の目標は、人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応しうる人材を養成することです。

教育システム

人文学研究科は従来の教育システムをさらに強化して、人材を養成します。

明確な教育プログラム

人文学研究科は、文学研究科（修士課程）と文化学研究科（独立研究科博士課程）を改組・統合することによって誕生しました。一貫性ある明確なプログラムに従って学修、指導を進めることにより、従来の体制にくらべ、はるかに高い教育効果をあげることができます。学生は、よりはっきりとした目的意識をもって、専門分野の研究を深められるようになりました。年次ごとのプログラムが明確に定められているので、後期課程からの編入生も、他大学院の前期課程（修士）における学修成果をスムーズに移行させることができます。

強化された指導体制

学修プロセスの徹底

専攻ごとに、各年次における学修の内容を具体的に定め、その修得を学生に徹底させます。

指導教員チームの編成

学生一名に対して、3名からなる指導教員チームが編成されます。チームにはかならず他専攻の教員が一名参加します。これにより学生は高い専門性ばかりでなく、幅広い学問的視野をも獲得することができます。

履修カルテの導入

学生ひとりひとりについて、履修カルテを作成します。これによって指導教員チームは学生の学修に関する情報を共有することができます。履修カルテは、指導プロセスの透明化にも役立てます。また学修プロセス委員会を設置することによって、指導方法をつねに検証・改善する仕組みをととのえます。

アドミッションポリシー

大学院博士課程前期課程

人文学研究科は博士課程前期課程に次のような学生を求めています。

人文学諸分野に関心を持ち、既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、追究していく情熱を持っている人
〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲〕

自ら選んだ専門分野の研究を深め、その学術的展開を志す人
〔求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力、関心・意欲〕

社会の一員としての自覚を持って、自らの学術研究を社会との係わりで展開していく意欲を持っている人
〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲〕

博士課程後期課程

人文学研究科は博士課程後期課程に次のような学生を求めています。

人文学諸分野に関心を持ち、既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、追究していく情熱を持っている人
〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲〕

自ら選んだ専門分野の研究を深め、その学術的展開を行って研究者を志す人
〔求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力、関心・意欲〕

研究者としての自覚をそなえ、自らの学術研究を学際的かつ国際的な幅広い視野のなかで展開していく意欲を持っている人
〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲〕

人文学研究科の構成

人文学研究科は、2つの専攻によって人材を養成します。また研究科内の共同研究組織による研究科共通科目を設定しています。

人文学研究科

文化構造専攻

哲学コース

哲学
倫理学

文学コース

国文学
中国・韓国文学
英米文学
ヨーロッパ文学

社会動態専攻

史学コース

日本史学
東洋史学
西洋史学

知識システム論コース

心理学
言語学
芸術学

社会文化論コース

社会学
美術史学
地理学
文化資源論（連携講座）

教育研究分野

人文学推進 インスティテュート

地域連携センター
倫理創成プロジェクト
教育プログラム
日本語日本文化
（KOIAS）
神戸雰囲気学研究所
文化交渉学

詳細→26・32頁

文化構造専攻

文化構造専攻は、人類がこれまで蓄積してきた人間と社会に関する古典的な文献の原理的研究という人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことのできる人材を養成します。

前期課程においては、研究者としての基礎能力を備えると共に、人文学を知識基盤社会に活かすことのできる人材を養成します。

後期課程においては、研究を企画し、組織できる能力を併せ持つ自立した研究者を養成します。

入学定員

博士課程前期課程：17名
博士課程後期課程：8名

取得できる学位

博士課程前期課程：修士（文学）
博士課程後期課程：博士（文学）
または博士（学術）

社会動態専攻

社会動態専攻は、古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動態的分析能力を育成し、新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる人材を養成します。

前期課程においては、研究者としての基礎能力を備えると共に、人文学を知識基盤社会に活かすことのできる人材を養成します。

後期課程においては、研究を企画し、組織できる能力を併せ持つ自立した研究者を養成します。

入学定員

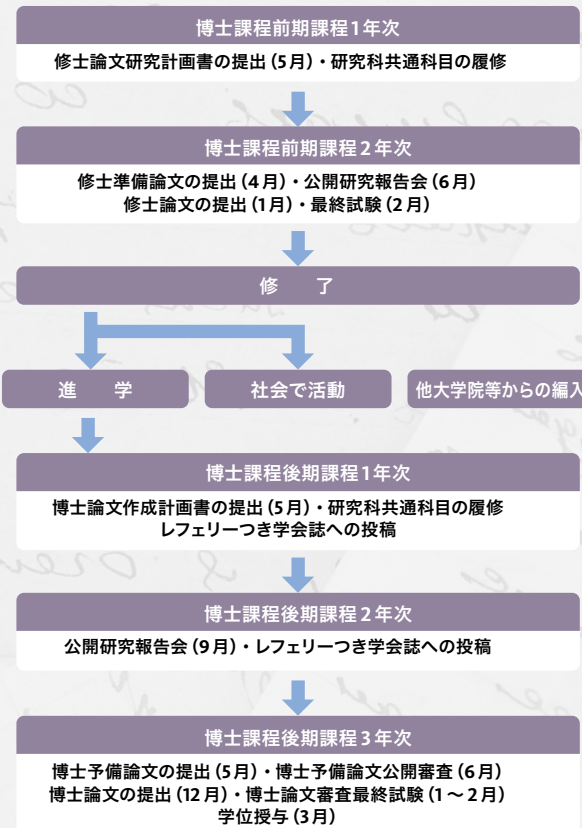
博士課程前期課程：27名
博士課程後期課程：12名

取得できる学位

博士課程前期課程：修士（文学）
博士課程後期課程：博士（文学）
または博士（学術）

学修プロセス

学生はすべての年次において、専門分野に關係する授業を履修します。これによって、専門分野の研究を進める上で必要な基礎知識、スキル、語学力を修得し、向上させます。学生はすべての年次において、修士論文ないしは博士論文の指導にかかわる演習を履修します。



哲学コース

Philosophy

哲学



教育研究分野について

哲学と倫理学二つの研究分野からなる哲学コースには、古代ギリシアから現代分析哲学に及ぶ多様な研究領域を専門とする教員が揃っています。講義や原典講読を柱とする演習と、哲学コースに所属する大学院生と教員全員が参加する合同演習を中心に徹底した個人指導を行うことで、修士論文・博士論文の執筆を支援しています。さらに、「哲学懇話会」は、研究報告会、機関誌『愛知』の定期的な刊行などを行っています。学生は、大学院修了後は、研究者の道以外に、公務員、教員、出版社やその他の一般企業で活躍しています。

哲学コースでは、古典テキストの読解に必要な解釈学的素養と現代的諸問題の考察に求められる批判的分析能力を重視する一方、現代の研究者に求められるコミュニケーションの力を養うために、海外の連携大学との交流も行っています。

教員紹介

教授 茶谷 直人

CHATANI Naoto

哲学教育研究分野所属

専門分野 古代ギリシア哲学・生命倫理学

アリストテレス哲学の実像と意義を見定めるべく、彼の思索におけるキタームの一つである類比概念を手がかりに、目的論的自然観、可能態－現実態論、心身論、幸福論など種々の問題に取り組んできた。また近年は、様々な喫緊の問題を抱えている現代医療に関し、自律原則に注目しながら、インフォームド・コンセント、安楽死などのテーマを考察している。大学院のゼミでは各自の研究対象を踏まえつつテーマを選び、古典テキストを誠実かつ批判的に読み解く能力、および種々の哲学的・倫理的諸問題を柔軟に考察する力の向上をはかる。

●主な著書・論文

『アリストテレスと目的論－自然・魂・幸福』見洋書房 2019年
『部分と全体の哲学』共著（「アリストテレスにおける「部分」と「全体」担当」、春秋社、2014年）
「アリストテレスの心身論におけるテクネーアナロジーと機能主義」（関西哲学会編『アルケー』第14号、2006年）

准教授 加藤 憲治

KATO Kenji

専門分野 フランス哲学

これまでベルクソン哲学を中心に哲学上の諸問題（存在論、認識論、身体論、自由論、言語論、方法論等）を考察してきた。今後とも自我論、他者論、時間論、生命論、社会論における諸問題を、ベルクソンを手掛かりとしながら検討していきたい。それと同時に、第一に現象学運動も含めた「生の哲学」という観点から、第二にメヌ・ド・ピランを端緒とする「フランス・スピリチュアリズム」の観点から、このベルクソン哲学を哲学的に位置づけることも試みたい。大学院の演習では、大学院生の専門に応じたテキストを精読すると共に、そこでの議論を通して論文執筆に資するよう、努めている。

●主な著書・論文

「ベルクソンの言語批判とコミュニケーションの問題」（『神戸商船大学紀要 第一類 文科論集』第五十一号、2002年）
「ゼノンのパラドクスとベルクソンの持続の発見」（『神戸商船大学紀要 第一類 文科論集』第五十二号、2003年）
『ベルクソン哲学における神の問題』（『神戸大学文学部紀要』第41号、2014年）

講師 新川 拓哉

NIIKAWA Takuya

専門分野 心の哲学（特に意識の哲学、知覚の哲学）

意識をめぐる哲学的諸問題を専門にしています。特に、意識の価値論と知覚的意識の形而上学に分析哲学的なアプローチで取り組んでいます。その他にも、科学者と共同で実験現象学や心理学の研究も行っています。さらに最近では、ヒト脳オルガノイドをめぐる倫理問題にも取り組んでいます。演習では、意識の哲学や知覚の哲学の文献の読解を通じて、心や意識の謎を解きほぐす楽しさを味わってほしいと思っています。

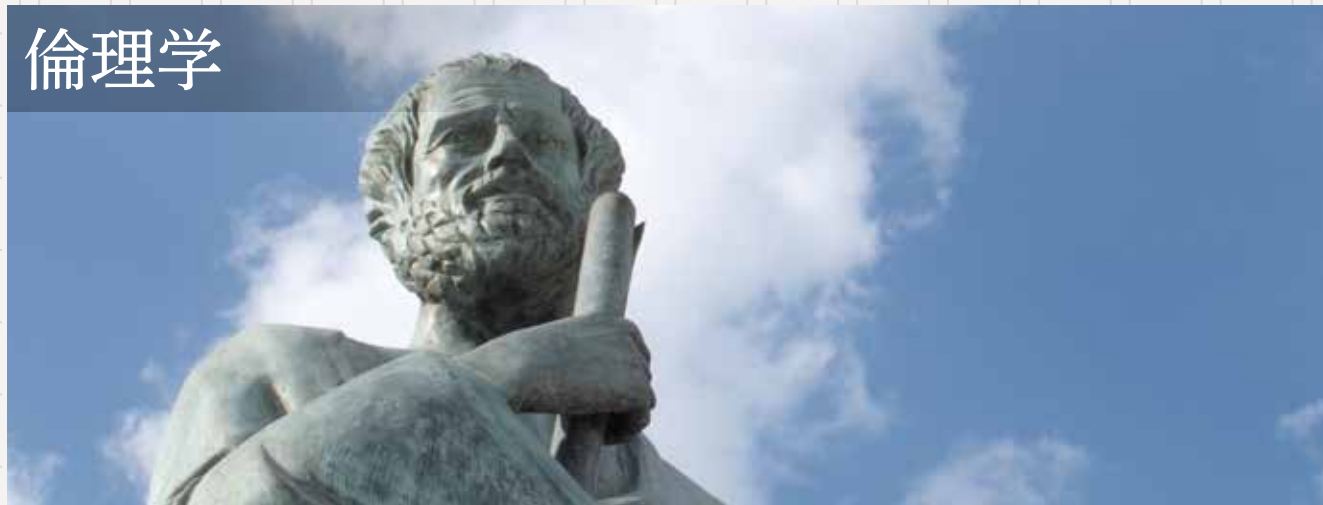
●主な著書・論文

“Naïve Realism and the Conception of Hallucination as Non-Sensory Phenomena”, *Disputatio* 9(26), 2017年
“Moral Status and Consciousness”, *The Annals of the University of Bucharest - Philosophy series* 60 (1), 2018年
“Classification of Disjunctivism about the Phenomenology of Visual Experience”, *The Journal of Philosophical Research* 44, 2019年
“Illusionism and Definitions of Phenomenal Consciousness”, *Philosophical Studies (online first)*, 2020年

古代より連綿と続く哲学者達の「愛知」の営みを真摯に学びつつ、それにより培った洞察力を活かして現代社会の諸問題に切り込むことのできる人を養成します。

また、そうした能力を次世代に継承できる専門家を養成します。

倫理学



教育研究分野について

人間と社会の在り方が未曾有の変容を遂げつつある現在、「生き方の学的探求としての倫理学」には、様々な問題の原理的捉え直しと、新たな「共生のビジョン」の創造が求められています。「倫理学」分野では、「哲学」分野とも連携しつつ、特に現代哲学・現代思想において焦点となっている問題群について、原理的に、あるいは比較哲学的観点から考察します。また、人文学研究科のスタッフ・院生とともに哲学コース全体として取り組んでいる「倫理創成プロジェクト」では、生命・環境・工学などをめぐる具体的諸問題に関する研究に取り組んでいます。

教員紹介

教授 中 真生

NAKA Mao

専門分野 現代哲学・倫理学

レヴィナスの提示する、「他者」または「他なるもの」との関係を、「苦しみ」や「身体」といった観点から考察してきた。現在は「生殖」をメインテーマに据え、ジェンダーや身体を軸に生殖について考察する理論的研究と、生殖に関わる現実の苦しみを具体的に把握し提示する実践的・応用的研究を、互いに関連させつつ行っている。演習では、テキストを丁寧に味読し、その肌触りを感じつつ、著者と自らの思考に耳を傾ける楽しさを感じられるよう努めたい。

●主な著書・論文

『生殖する人間の哲学－「母性」と血縁を問い直す』勁草書房、2022年
「母であること」(motherhood)を再考する――産むことからの分離と「母」の拡大、『思想』2019年5月号、岩波書店、2019年
“Some Glimpses of Japanese Feminist Philosophy: In Terms of Motherhood,” John W. M. Krummel (ed.), *Contemporary Japanese Philosophy: A Reader*, Rowman & Littlefield International, 2018年
“The Otherness of Reproduction: Our Passivity and Control of It” in Nicholas Smith & Jonna Bornemark (ed.), *Phenomenology of Pregnancy*, Södertörn University Press, 2016.
『哲学への誘い 第2巻 一哲学の身振り』、共著（第1章「問いつめる」担当）、東信堂、2010年。
『悪と暴力の倫理学』、共著（第2章「苦しみの意味を求めて－レヴィナスから見る悪と苦しみ－」担当）、ナカニシヤ出版

講師 安倍 里美

ABE Satomi

専門分野 メタ倫理学、生命倫理学

理由概念に注目して規範性の解明を目指すメタ倫理学を専門に研究している。価値論や行為論、形而上学の知見を生かしつつ、道徳の客観主義と主観主義の対立、規範的事実・性質についての實在論と非實在論の対立、価値と義務の関係をめぐる対立などの問題などに取り組んできた。また、メタ倫理学との接続を意識しつつ、先制医療と医療者の義務というような応用倫理学上のテーマについての考察もしている。演習では、テキストの丹念な読解を通して、フェアに人の考えを理解するということの重要性や、「わからないこと」に時間をかけて向き合うことの楽しさを実感してもらえるように努めたい。

●主な著書・論文

「義務の規範性と理由の規範性－J. ラズの排除的理由と義務についての議論の検討－」（『イギリス哲学研究』42号、2019年）
「価値と理由の関係は双条件的なのか－価値のバックパッシング説明論の擁護－」（『倫理学年報』68号、2019年）
「侵襲性の高い予防的介入と無危害原則」（『先端倫理研究』14号、2020年）



文学コース

Literature

古典テキスト研究能力と確かな語学力に基づく分析能力により、
文学的遺産を将来に継承できる人材・文化交流の架け橋となる人材を養成します。

国文学

教育研究分野について

日本の言語文化の特質について、また日本文化を通して見た人間の普遍性について研究する。前期課程ではテキスト解析能力の鍛錬等、後期課程では高度な研究能力の養成等を行う。

教員紹介

講 師 田中 智子 TANAKA Tomoko

専門分野 日本中古文文学

中古文文学、とくに『古今和歌六帖』や初期定数歌をはじめとする、10世紀後半頃の和歌文学を研究の対象としている。10世紀後半は、勅撰集でいえば『後撰集』と『拾遺集』の成立の間の時期にあたり、研究史上、ともすれば等閑視されがちであった。しかしながら『古今和歌六帖』の所載歌や初期定数歌には、万葉歌の訓詁作業の進展や、歌合・屏風歌の隆盛といった時代の特色が如実に反映しており、その和歌表現には独自の面白さがある。これらの和歌文学の史的意義を考察することにより、もっぱら関心を寄せている。

●主な著書・論文

「曾禰好忠歌の表現」(『中古文文学』2023年11月)
「天平宝字元年十二月の伴家持歌―立春をめぐる―」(『上代文学』2023年4月)
「古今和歌六帖の伊勢物語」(『国語と国文学』2022年7月)

講 師 有澤 知世 ARISAWA Tomoyo

専門分野 日本近世文学

江戸戯作の第一人者である山東京伝の営為(戯作執筆・考証・煙草入れ店の経営など)を、主な研究対象としている。具体的には、京伝をはじめ、当時の知識人たちが取り組んだ考証に注目し、それがどのような人的交流のもとで如何なる資料を参照して行われたものであるのかを明らかにすることによって、当時の「知」の蓄積と伝達の様相を考察するとともに、いわゆる「雅」の営為である考証の成果が、「俗」の営為である戯作作品のなかに顕れる現象について分析することで、近世後期の俗文芸の在り方を理解することを目指している。

●主な著書・論文

「京伝作品における異国意匠の取材源―京伝の交遊に注目して―」(『近世文藝』2017年6月)
「山東京伝の考証と菅原洞簫―『画師姓名冠字類鈔』に見る考証趣味のネットワーク」(『国語国文』2017年11月)
「菅原洞簫の古書画展観会」(『上方文藝研究』2019年6月)

教 授 樋口 大祐 HIGUCHI Daisuke

専門分野 日本古典文学(中世を中心とする)

私の研究のテーマは、前近代日本列島の物語・説話や歴史文学を対象に、それらのナラティヴが(ジェンダーを含む)世界の多様性に対応する複数の視点を持つための仕組みを探究することです。また、2023年度より、科研費基盤研究(C)「日中戦争・アジア太平洋戦争に関する女性視点のナラティヴの諸相についての調査・研究」に研究代表者として従事しています。

授業(演習)では『とりかへばや』等の後期王朝物語、『今昔物語集』等の説話文学、『平家物語』等の歴史文学、および多種多様な室町物語・絵巻等、受講生の関心に応じて、日本古典文学のテキストを丁寧に読み、多様で豊かな未来のための視座を見出すことをめざしています。

●主な著書・論文

『「乱世」のエクリチュール』(森話社、2009年)
『変貌する清盛―『平家物語』を書きかえる―』(吉川弘文館、2011年)
「二十世紀の和泉式部伝説」(『東アジアの女性と仏教と文学』所収、勉誠出版、2017年)
「人文学を解き放つ」(編集代表、神戸大学出版会、2023年)
『光と風と夢―街角の記憶を歩く―』(共著、神戸新聞総合出版センター、2024年)ほか。

准教授 梶尾 文武 KAJIO Fumitake

専門分野 日本近代文学

昭和期における文学と思想の複合的展開を研究の対象としている。具体的には、三島由紀夫の小説・戯曲・評論を中心に、1940年代から60年代までの文学作品と文芸批評・政治思想の連関に注目し、大衆社会における「文学」の変容過程を考察してきた。近代日本の文学者と思想家に即して、文体、叙法、あるいは表現者の方法意識や無意識といったミクロな水準に降りたって表現を把握するだけでなく、国家的社会的イデオロギーと表現が切り結ぶマクロな相関性を解明することを目指している。

表現を歴史に問い、歴史を表現に問う「解釈」の経験を受講生と共有したい。

●主な著書・論文

『否定の文体―三島由紀夫と昭和批評』(鼎書房、2015年)
「詩的言語と国家の原理：吉本隆明と自立派における詩学的批評」(『昭和文学研究』2018年9月)
「想像力の女性的形状―倉橋由美子の初期《I型》小説」(『国文論叢』2019年)

准教授 石山 裕慈 ISHIYAMA Yuji

専門分野 日本語学(日本語史)

日本語史学に関心があり、特に日本漢字音史(つまり漢字の「音読み」の歴史)を研究しています。古代中国語を当時の日本人がどのように受け入れ、それがどのように変わっていったのか、という点に興味を抱いています。個別の研究テーマとして、字音声調と漢語アクセントとの相関関係や、学習の場によってどのような違いがあったのか、またそれが日本漢字音の形成にどのように関わってきたのか、などといったことにも着目しています。

●主な著書・論文

「貞享版『補忘記』の漢語アクセント」(『国語と国文学』85-3、2008年)
「中世呉音字音直読資料における境界の消滅について」(『日本語の研究』5-3、2009年)
「室町時代における漢字音の清濁―『論語』古写本を題材として―」(『弘前大学教育学部紀要』108、2012年)
「漢字音の一元化」の歴史」(『国語と国文学』95-10、2018年)

教 授 實平 雅夫 SANEHIRA Masao

専門分野 日本語教育学

日本語の教育や学習は個人的な行為であるが、外的要因の影響と同時に教授者・学習者の意志がその形態や結果に影響を与えていくことを研究している。また、日本語日本文化教育インスティテュートや留学生センターの教育研究に関わる中で、言語文化と文化能力の関係性を模索している。日本語日本文化教育に関する様々なテーマを取り上げて、先行研究を精読し、日本語学・国語学の素養に優れた高度な人材の養成を目指している。

●主な著書・論文

「教育理念を具現化する Flexible Classroom(Ⅰ)」(共著、『神戸大学留学生センター紀要』11、2005年)
“Use of an Open Source Content Management System for Pre-orientation to an Intensive Summer Course in Japanese Language and Culture”(共著、『神戸大学留学生センター紀要』12、2006年)
『留学生のための日本の歴史 Japanese History for Foreign Students』(共著、大阪外国語大学、2006年)

講 師 池田 来未 IKEDA Kurumi

専門分野 日本語文法

複合動詞が語彙的な意味を多く残した用法から、より抽象化された文法的な用法を表すようになる過程と要因について主に研究しています。また個々の語の研究だけでなく、似た用法を持つ語群の影響・競合関係や、一般的にどのような用法変化が起こりやすいのかといった言語変化の傾向や方向性についても関心があります。受講生の皆さんが用例を丁寧に分析することにより、個々の語の考察のみならず、日本語、ひいては言語一般の特質を解明できるようになることを目指しています。

●主な著書・論文

「複合動詞『〜ハツ』の歴史的変遷」(『国語国文』91(7)、2022年7月)
「複合動詞『〜ヌク』の史的変遷」(『国文』(134)、2021年7月)
「ナニモの歴史的変遷―否定との共起に着目して―」(『国文』(127)、2017年7月)



中国・韓国文学



教育研究分野について

隣国である中国・韓国の文学と語学、及び文化背景を研究対象とする。授業は精確に一次資料を読むことを基本におきつつ、更に大胆な、オリジナリティのある解釈を施していくことを目標とする。学生の研究テーマは古典詩・小説、現代・同時代文学など多岐にわたっており、それぞれの関心に即して自由に論文執筆を進めていく。研究室は少人数で和気藹々とした雰囲気であり、交換留学などによる国際交流も活発に行われている。後期課程進学後は、博士論文執筆を第一の目標とすると同時に、学内外、また海外での研究会やシンポジウムで積極的に発言・報告してゆくことが求められている。

教員紹介

教 授 濱田 麻矢 HAMADA Maya

専門分野 中国現代文学

二〇世紀の中国語文学に現れる女性表象に関心を持っている。「中国語文学」とは耳慣れないことばだが、中華人民共和国に限らず、台湾や香港、あるいは米国、東南アジアの華僑が中国語を用いて創作した文学における女性像の変遷を文学史全体の中に位置づけることを最終的な目標として考えている。現代中国語圏における文化を考える上で、映画や演劇など、文字媒体によらない芸術にも目を向けていきたい。

●主な著書・論文

『少女中国 書かれた女学生と書く女学生の百年』（岩波書店、2021年）
（翻訳）張愛玲『中国が愛を知ったころ』（岩波書店、2017年）
「女学生謝婉瑩から作家冰心女士へ」（『『春水』手稿と日中の文学交流——周作人、謝冰心、濱一衛——』花書房、2019年）

特任准教授 劉 萍 LIU Ping

専門分野 中国古典文献学

中国北京市出身。北京大学中文系で教鞭をとりながら現在、神戸大学人文学研究科の特任准教授を兼任している。
研究対象は、中国古典文献学と近代日本の中国学。日中比較文化の視座のなかで、中国古代の書籍の伝播と、日本の中国学者による中国古典学の研究とを材料とし、学術史を描きだすことに取り組んでいる。

●主な著書・論文

『「論語」と近代日本』中国青年出版社、2015年3月。
『津田左右吉研究』中華書局、2004年11月。
「和刻本『天文版論語』述略」、『北京大学中国古典文献研究中心集刊』第12輯、北京大学出版社、2012年12月。

教 授 朴 鍾祐 PARK Jong Woo

専門分野 日韓比較文学

韓国近代文学の中で、19世紀より20世紀にかけての思想と文学の関連性を探ることに興味をもっている。また韓国近代文学の担い手としての当時の知識人らの思想的形成過程と文学との関連にも注目している。この点に着目する背景には、日韓両国における政治的かつ文化的関係性もたらした思想的軋轢、また同時に受容という重層性があるからである。そのような様相を日韓両国の近代文学史の中で探っていきたい。

●主な著書・論文

「平田篤胤の「日本」への回帰」「近世と近代の通廊十九世紀日本の文学」 双文社出版
「梅花と天神思想」「韓日中比較文化事典」 センガゲナム出版社（韓国）
（共訳）金裕貞「山里の旅人」「炎天」（『海港都市研究』14、2019年）

講 師 早川 太基 HAYAKAWA Taiki

専門分野 中国古典文学

唐宋時代の詩歌を中心とし、漢字文化圏の古典漢語による文学作品の研究に取り組む。最近の方向性は、①漢魏から唐宋にかけての詩歌創作における「個」の自覚の軌跡を追い、文学表現の展開の流れを描きだす。②詩歌という形式の本質的問題である音楽性について考察するため、唐宋時代の歌詞の「格律」と、古楽譜の音楽的特徴とを対照させ、両者の関係性を分析し、実際にどのように歌われたかを探りたい。

●主な著書・論文

「凄き望諸葛—陶淵明在黄庭堅詩中之形象」（『宋代文化研究』24、2017年）
「琵琶曲『啄木』攷—宋代文人の聴いた音楽」（『東方学』136、2018年）
「北宋文学における啄木鳥—寄託の深層化」（『日本中国学会報』72、2020年）
「陳維崧と徐紫雲—明末清初の男色文学の分析」（『未名』39、2021年）

ヨーロッパ文学

教育研究分野について

ドイツ文学、フランス文学、イタリア文学からなるヨーロッパ文学では、それぞれの言語や文化に対する深い理解をめざした講義や研究指導がおこなわれます。授業では、テキストの正確な理解と分析をもとに、そうしたテキストを作り上げている要因を様々な方法論を駆使しつつ、多角的に考察することを目的としています。修士論文や博士論文作成の指導は、少人数ゼミや密接な個別面談を通じて、きめ細かくおこないます。

教員紹介

教 授 増本 浩子

MASUMOTO Hiroko

専門分野 現代ドイツ文学・スイス文化論

これまでフリードリヒ・デュレンマットの演劇論と戯曲を中心に、ドイツ語圏スイスの現代文学を主な研究対象としてきました。スイスは1291年の建国以来、多言語・多文化の国であり続け、現在のように世界中で多文化主義が声高に語られるずっと前からポスト国民国家の理想的な形態を実現してきたと言われていいます。が、その一方で、解体することなくひとつの国としてのまとまりを保持するために特殊なナショナル・アイデンティティを必要とし、その偏狭さが多くの人々を悩ませる原因となってきました。このような文脈で、スイスのナショナル・アイデンティティをめぐる政治的言説と文学との関連を探ることも、研究課題のひとつです。

また、スイスの多言語・多文化主義から出発して、広く越境文学にも興味をもっています。具体的には、外国語としてのドイツ語で創作する多和田葉子、ジョージア（旧グルジア）出身のドイツ語作家グリゴル・ロバキゼやニノ・ハラティシュヴィリに注目しています。

●主な著書・論文

『フリードリヒ・デュレンマットの喜劇』（三修社、2003年）
『ナチスと開った劇場—精神的国土防衛とチューリヒ劇場の「伝説」』（共著、春風社、2021年）
「多和田葉子『旅をする裸の眼』における言葉という語り手」、『広島ドイツ文学』第34号、2021年、131-148頁。

教 授 河合 成雄

KAWAI Naruo

専門分野 イタリア文学・思想

これまで、イタリア15世紀の思想家、マルシリオ・フィチーノを中心に、イタリア文学・思想について研究をしてきた。近年では、20世紀初頭の文学、特にルイージ・ピランデッロの研究も平行しておこなっている。イタリア語のlettereの意味のように、書かれたものを広く扱い、狭い範囲の文学に留まることなく研究・教育を行いたい。授業は、前期課程では、古典文献の精読により読解力をつける一方、幅広くたくさんの文献に触れさせることにより研究に必要な視野を養う。その上で後期課程は、イタリアでの発表を前提に討論を中心に行いたい。

●主な著書・論文

「フィチーノの愛の理論における個人の位置づけ」（『イタリア学会誌』43号）
"Il concetto di individuo di Marsilio Ficino nel suo commento al Convivio di Platone" (L'immagine negli studia humanitatis, 1995)
"Aspetti esoterici ed essoterici del pensiero di Marsilio Ficino" (Proceedings of the third Kyoto-Siena Symposium)

教 授 中畑 寛之

NAKAHATA Hiroyuki

専門分野 フランス近現代文学

ステファヌ・マラルメが1890年代に書いた時評（彼が「批評詩」と呼ぶテキスト群）を中心に、これまではマラルメと同時代の社会的・政治的出来事との関わりについて研究してきました。その後、80年代後半の劇評を取り上げ、詩人とフランス第三共和制との関係を＜演劇＞と大衆という観点から、さらにマラルメの蔵書を調査することにより彼と同時代文学者たちとの交友を書誌学的観点から考察しています。どれも「出来事の現場」から詩人のエクリチュールを問い直すことを狙っているかと思えます。また、今後はマラルメの著作の編集過程から刊行・販売（詩人による本の作成と公開および広告戦略）までをひとつの文学活動として検討すると同時に、19世紀末フランス・ベルギーの出版界についても研究していくつもりです。彼は自著を刊行するに際して手ずから「台紙貼付け制作見本（maquette）」を作っており、『漆の抽斗』『バージュ』『詩と散文』そして『詩集』といった書物を公にするマラルメの手づき（つまり、文学と社会の関わり）を具体的に明らかにしたいと考えています。

●主な著書・論文

『世紀末の白い爆弾—ステファヌ・マラルメの書物と演劇、そして行動』（水声社、2009）
『GRIHL II 文学に働く力、文学が発する力』（共著、吉田書店、2021）
《Variations sur un sujet : l'Aristocratie — autour de «La Cour» mallarméenne》（ELLF, 2005）
《Mallarmé et l'Académie française》（ELLF, 2004）

講 師 廣田 郷士

HIROTA Satoshi

専門分野 フランス語圏文学

これまでエドゥアール・グリュッサン、エメ・セゼールという二人のフランス語詩人の「風景」と「歴史」の詩学について研究してきました。現在は、カリブ海地域やアフリカ大陸のフランス語文学を中心に、「フランコフォニー」（フランス語圏）と呼ばれる諸地域の文学を幅広く研究しています。研究対象の歴史的性質上、（脱）植民地主義、（反）人種主義、自然と環境、革命思想やときに反動思想など、広い意味での政治と文学の間の往還関係に関心を寄せています。研究と教育で重視するのはあくまでもテキスト分析ですが、それに閉塞しない文学研究の可能性を探っています。

●主な著書・論文

（共著）*Imaginaire et politique de la créolisation : Édouard Glissant et nous*, Éditions de l'Aube, 2023.
（共著）*Archipels Glissant*, Presses universitaires de Vincennes, 2020.
（論文）『『トロピック』の戦略と詩学—イデオロギーとエコロジーの交わる地平について』、『フランス語フランス文学研究』、第122号、2023年、49-63頁。

准教授 久山 雄甫

HISAYAMA Yuhu

専門分野 ドイツ思想史、雰囲気学

研究の中心テーマはゲーテの「ガイスト（Geist）」概念です。日本語では「精神」「精気」「才気」「霊」「気風」などさまざまな訳し分けられる多義的な言葉ですが、こうした意味の多重性が18世紀から19世紀のドイツ語圏で変遷していく様相を、ゲーテと彼の同時代人の文学作品や哲学・自然科学論文をとりあげて考察してきました。また「ガイスト」の含意の多くは、東アジア思想の基礎概念のひとつである「気」が指し示す意味内容と重なります。これについて「雰囲気学の現象学」の方法論を用いた文化比較論研究を進めながら、ゲーテ研究も手がかりにして、雰囲気学という新学問領域の立ち上げに挑戦しています。

●主な著書・論文

Erfahrungen des ki. Leibessphäre, Atmosphäre, Pansphäre. Freiburg und München, 2014.
Krankheit, Spiegel und Hoffnung. Makarie als eine „geistige“ Figur in Goethes *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. In: Gernot Böhme (Hg.): *Über Goethes Romane*. Bielefeld, 2016, S. 69-79.
「形態学と想像力—ゲーテのナマケモノ論における「詩的表現」の意味」『モルフォロギア』第38号（2016）、59-88頁。
Weltseele, Weltgeist und das Ungesagte in Goethes Altersgedicht *Eins und Alles*. In: *Goethe-Jahrbuch* Bd. 135, 2018, S. 39-46.



英米文学

教育研究分野について

英米文学では、広く西洋文学を視野に入れつつ、イギリス及びアメリカの文学を教育研究の対象とする。文学テキストの生命ともいえる言葉そのものへの深い関心のもとに、文学テキストとしての英語、及び、文学をとりまく歴史的・社会的・文化的コンテキスト（文脈）への深い理解を養成し、テキスト（言葉）とコンテキスト（文脈）の交錯の彼方に、文学の存在を探求する。

博士前期課程では、文学テキストとしての英語の精緻な理解を通して、英語文献の読解能力、英語文脈の解析能力、英語による表現能力、を養成し、英語教育、翻訳、出版ジャーナリズム等に携わる、高度専門職業人の育成を計る。博士後期課程では、文学テキストの読解に加えて、先行研究の検証・批判と学術論文作成の訓練を行い、研究者の養成を目指す。



教員紹介

教授 山本 秀行
YAMAMOTO Hideyuki

専門分野 現代アメリカ文学・演劇

現在の研究課題は、(1)Tennessee WilliamsからDavid Henry Hwangまでの現代アメリカ演劇(2)アメリカのマイノリティ作家の文学、特にアジア系アメリカ人による文学。大学院の授業においては、カルチュラル・スタディーズ、ポスト・コロニアリズム、ジェンダー・スタディーズなど、現代の文化・文学理論を取り上げ、理論の理解・修得を通して、学生個々の研究を現代的に展開させるべく指導を行っている。

●主な著書・論文

(共編著)『アジア系トランスボーダー文学—アジア系アメリカ文学研究の新天地』(小島遊書房、2021年)
(単著)『アジア系アメリカ演劇—マスキュリティの演劇現象』(世界思想社、2008年)
(共編著)『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』(世界思想社、2011年)
(共著)『憑依する過去—アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』(金星堂、2014年)

教授 芦津 かおり
ASHIZU Kaori

専門分野 イギリス文学・演劇

研究対象の中心はシェイクスピア。近年は日本におけるシェイクスピア受容を中心に研究している。日本におけるシェイクスピア劇の翻案や翻訳は、この劇作家と日本との長く複雑な交渉の産物であり、その過程の諸相を映し出す鏡とも呼べるもの。その分析を通して、日本社会や歴史・文化の特性を浮き彫りにすると同時に、英米主導のシェイクスピア批評の再検討や、シェイクスピア劇の読み直しをも目指している。

●主な著書・論文

(単著)『股倉から見る『ハムレット』—日本人とシェイクスピア』(京都大学学術出版会、2020年)
(論文) “ ‘Hamlet through your legs’: Radical Rewritings of Shakespeare’s Tragedy in Japan,” *Critical Survey*, 33.1 (2020), 85-102.
(論文) “Zen *Hamlet*: Kuniyoshi Munakata’s Noh Adaptation of Shakespeare’s Tragedy,” *Shakespeare Studies* 56 (2018), 1-17.

准教授 奥村 沙矢香
OKUMURA Sayaka

専門分野 20世紀イギリス文学・小説

Virginia Woolfを中心とした女性作家を研究している。近年、モダニズム関連の研究書や論考は日々膨張し続けている。その一方で、個々の作家の試みはモダニズムという大きなうねりの中に飲み込まれ、その特異性は影を潜めつつあるようにも見える。この傾向は、また、個々のテキスト解釈の行き詰まりの突破口を作家の周辺研究に見出さんとする研究者諸氏によって歓迎されてもいる。現在の課題は、こうした最近の研究動向を睨みつつも、今や古臭がられ疎んじられるくらいのある精読によるテキスト解釈に敢えて立ち返り、個々の作品を、その具体的表象に着目しつつ緻密に分析し直すことによって、抽象論に終始しがちな文学談義に色を添えることである。大学院の授業においても、まずは丁寧に作品を読み込むことを勧めている。

●主な著書・論文

(共編著)『よくわかるイギリス文学史』(ミネルヴァ書房、2020年)
(論文) “Women Knitting: Domestic Activity, Writing, and Distance in Virginia Woolf’s Fiction,” *English Studies* 89 (2008): 166-81.
(論文) “Rhoda Reads Shelley in *The Waves*: Echoes of ‘The Question’,” *Virginia Woolf Bulletin* 40 (2012): 8-14.
(論文) 「ウルフと／のうたた寝——『歳月』をめぐって」『ヴァージニア・ウルフ研究』第34号(2017)、pp.1-17.
(論文) “Who Is Behind the Curtain?: Privacy, Publicity, and Social Reform in *Night and Day*,” *Virginia Woolf Miscellany* 96 (2020): 13-16.

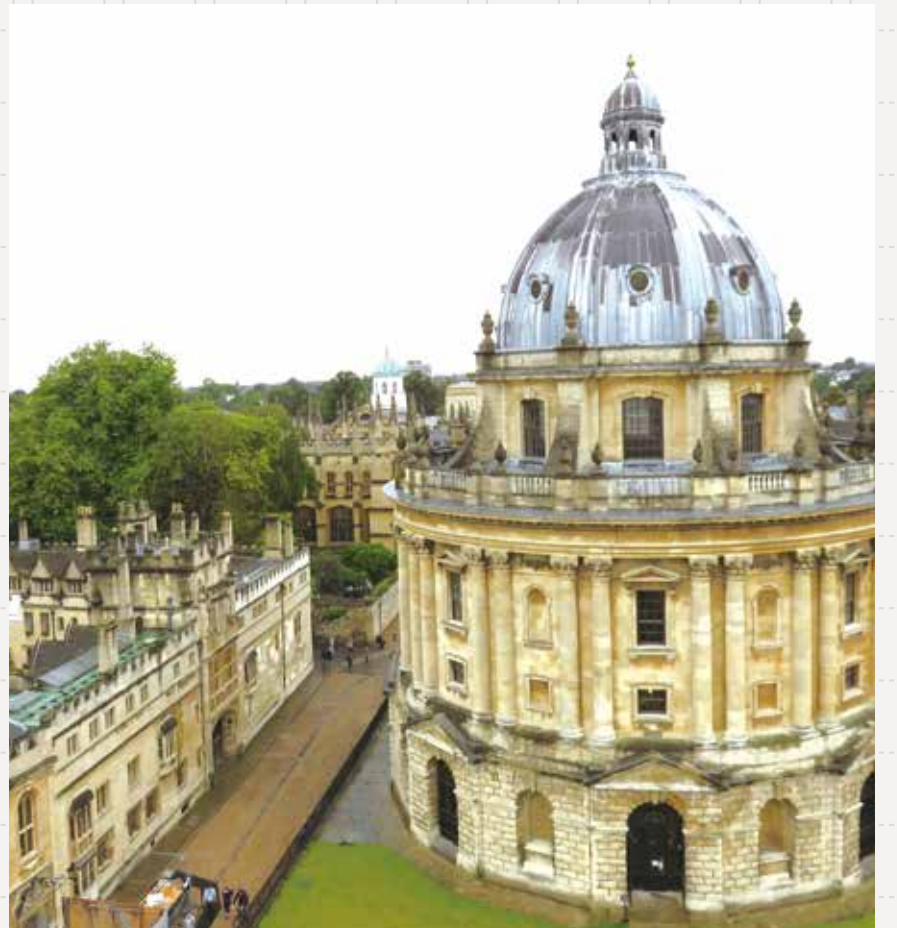
助教 平川 和
HIRAKAWA Nodoka

専門分野 現代アメリカ文学・小説

Don DeLilloを中心とした現代アメリカ文学について研究している。特に、小説の中の時間表象に関心を抱いている。小説は時間を自由自在に操れるが、それによって通常の時間の流れでは見落としがちな「別の現実」が見えてくることがある。小説を読むことで直線的な時間の流れから自己を解放し、自分でも気づいていない「別の自分」に出会ってみたいのではないだろうか。

●主な著書・論文

(論文) “Lose Yourself in Language: The Stray Poetics of Nonsense in Don DeLillo’s *Point Omega*” (『岐阜大学地域科学部研究報告』47号、2020年、pp.21-29)
(論文) “*Falling Man* without Organs: Don DeLillo’s Poetics of Slow Motion” (『関西アメリカ文学』第55号、2018年10月、pp.5-19)
(論文) 「クローゼットの中のジハード戦士——『ディスグレイسد』に見る9・11以後のムスリム・アメリカン」(『アメリカ演劇』第27号、2016年、pp.57-76)



史学コース

History

日本史学

教育研究分野について

日本史学は、古代から現代まで、日本列島上に展開した社会と国家を、構造的、動態的に把握することを目的とする学問である。そのためには、資史料の分析読解能力、研究史に対する深い理解、日本史学の問題を歴史学全体の中で考える広い視野、が必要である。日本史専修では様々な演習を通じてこれらの能力を養成に努めるとともに、具体的なフィールドを通じて歴史像を構築する営みを重視し、地域歴史遺産を保全し、活用する能力を高める実習の充実をはかっている。

教員紹介

教 授 奥村 弘 OKUMURA Hiroshi

専門分野 日本近代史

主な研究領域は、地域社会形成を中心とした、日本近代幕末から明治期の社会の形成過程の特質の解明。この視点からの神戸市の形成史や「満洲国」における地方統治のあり方についても研究を展開している。神戸市、明石市、三木市、赤穂市等の自治体史編纂もすすめている。阪神淡路大震災以降は、地域遺産の保存活用の実践的研究を展開し、歴史資料ネットワーク代表委員、国立文化財機構文化財防災ネットワーク委員等をつとめている。また文学部の地域連携センター事業責任者として、この分野での地域との連携事業をすすめている。

●主な著書・論文

「地方統治における満洲国協和会の位置——満洲国協和会第七次全国連合協議会の分析をととして——」(山本有造編『満洲国』の研究 京都大学人文科学研究所、1993年)
「地域社会の成立と展開」(歴史学研究会日本史研究会編『日本史講座』第7巻、近世の解体、東京大学出版会、2005年4月)
『大震災と歴史資料保存』(吉川弘文館、2012年)
『歴史文化を大災害から守る』(責任編集、東京大学出版会、2014年)
「三田藩魔藩と福沢諭吉・岩倉具視」(『日本史研究』655号、2017年)

教 授 古市 晃 FURUICHI Akira

専門分野 日本古代史

「人が人を支配する仕組み」について、日本の古代国家形成期である、5世紀から7世紀を中心に考えている。倭王を中心とする支配者集団が、支配の論理を目に見える形で表現し、人々に納得させるために用いた施設とは何か、またそれがどのように変化を遂げるのか。この問題をめぐって、これまでにさまざまな研究が積み重ねられてきたが当面、5・6世紀の王宮をめぐる諸問題、王宮と王陵をめぐる諸問題に関心をもっている。一方で、人々の暮らしの舞台である地域社会の成り立ちについて、吉備、播磨、摂河泉などを素材として検討している。

●主な著書・論文

『倭国 古代国家への道』(講談社現代新書、2021年)
『国家形成期の王宮と地域社会—記紀・風土記の再解釈—』(塙書房、2019年)
『日本古代王権の支配論理』(塙書房、2009年)
「日本古代における伝承と史実の間——オケ・ヲケ伝承を手がかりに——」(『郷向学の最前線——桜井市郷向学研究センター設立10周年記念論文集——』、2022年)
「5世紀の王権」(『古代文学と隣接諸学3 古代王権の史実と虚構』竹林舎、2019年)
「ふたつの難波宮」(『古代文学と隣接諸学8 古代の都城と交通』竹林舎、2019年)
「大化期の王権構造」(『歴史評論』821、2018年)

教 授 市澤 哲 ICHIZAWA Tetsu

専門分野 日本中世史

日本中世史、とくに鎌倉から室町初期の政治史を専攻している。①中世公家政権の構造的特質とその展開を解明すること、②建武新政から室町幕府成立期にかけての公武関係の特質と天皇の政治的地位を解明すること、③地域社会から南北朝内乱の意味を問うこと、を中心に研究を進めてきた。最近では、地域史研究を社会教育やまちづくりにどう活かすかという問題にも興味を持っている。研究史を誠実にたどり、史料を精緻に分析することに重点を置くことを、自戒を込めて、授業の指針としている。

●主な著書・論文

「映画『もののけ姫』分析——歴史ファンタジーに歴史学はどう関わるか——」(2004年『国文論叢』34号)
「南北朝内乱からみた西摂津・東播磨の平氏勢力圏」(『地域社会から見た源平合戦』岩田書院、2007年)
「14世紀政治史の成果と課題」(『日本史研究』540号、2007年)
『太平記を読む』(共著、吉川弘文館、2008年)
『日本中世公家政治史の研究』(校倉書房、2011年)
『新発見 日本の歴史 南北朝の動乱に迫る』(責任編集、朝日新聞出版社、2013年)

講 師 吉川 圭太 YOSHIKAWA Keita

専門分野 日本近代史

日本近現代史。とくに1920年代以降の社会運動について、運動と関わった法律家(弁護士)の活動や思想に着目して研究している。運動実践の中から形成されてくる法思想や理論、社会と法をめぐる諸問題について関心を持っている。また現代資料の保存活用をめぐる実践的な研究を進めており、阪神・淡路大震災の震災資料活用や、1970年代以降の住民運動・市民運動に関する資料の保存に関わっている。災害・公害・原発問題とそれに対する人々の諸運動を歴史的に検討することを課題としている。

●主な著書・論文

「一九二〇年代の社会運動と在野法曹—自由法曹団を中心に—」(『部落問題研究』209、2014年)
「一九二〇年代の借家人運動における法的実践」(『民衆史研究』78、2009年)
「第一次大戦後における弁護士布施辰治の思想と行動」(『歴史』109、2007年)
『阪神・淡路大震災における住まいの再建』(責任編集、人と防災未来センター、2012年)
「市民が描いた阪神・淡路大震災」(『阪神・淡路大震災像の形成と受容』岩田書院、2011年)
「阪神・淡路大震災の記録と記憶の継承に向けて」(『LINK』12、2020年)

文献研究とフィールドワーク研究という実証的分析手法をもとに、過去から現代に至る人間行動を歴史的に理解し、日本および国際社会における歴史文化の形成に主体的に対応する人材を養成します。

東洋史学

教育研究分野について

東洋史学では、東アジア世界とイスラム世界を教育研究の二本柱としています。学生に対する教育の目標は、研究対象における原典資料を読解し、分析する能力を高めること、問題を様々な観点から解釈する能力を発展させること、研究成果を的確に発信する能力を向上させることです。最近では前期課程修了後、社会に羽ばたく学生も増えています。

教員紹介

教 授 真下 裕之

MASHITA Hiroyuki

専門分野 南アジア史、イスラーム史、インド洋海域史

南アジアにおけるムスリム社会の歴史を、南アジア史の流れと、隣接する諸地域との交流関係という二つの視点から総合的に解明することが私の研究の目標です。前者の視点に関しては、ムガル帝国時代の歴史書に関するヒストリオグラフィー研究を行ってきましたが、現在はこうした基礎研究を踏まえて、国家制度史の研究に取り組んでいるところです。また後者に関しては、ペルシア語文化圏やインド洋海域という新たな切り口から、イスラーム関係資料ばかりでなく、欧語資料も用いて研究を進めています。

●主な著書・論文

「ムガル帝国宮廷における贈与儀礼とマンサブ制度」『メトロポリタン史学』15、2019。
「帝国のなかの福音：ムガル帝国におけるペルシア語キリスト教典籍とその周辺」齋藤晃編『宣教と適応：グローバル・ミッションの近世』名古屋大学出版会 2020。
「ディオゴ・デ・コウト『アジアのデカダ集』：解題と若干の翻訳」(共著)『東京大学史料編纂所研究紀要』32、2022。
「ムガル帝国における国家・法・地域社会」林佳世子編『岩波講座 世界歴史 13 西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀』岩波書店、2023。

准教授 伊藤 隆郎

ITO Takao

専門分野 アラブ史、イスラーム史

これまで主にマムルーク朝期エジプトとシリアの社会と文化を、同時代のアラビア語年代記、伝記集、地誌などの叙述史料および文書史料に基づき研究してきました。今後は、マムルーク朝史研究をさらに進める一方、考察対象の時代と地域を広げる予定です。現在特に関心があるのは、初期イスラーム時代から近現代までのアラビア語文献史、また歴史叙述や歴史観の問題です。なお、要望があれば、アラビア語以外のセム系言語(シリア語、ヘブライ語、エチオピア語(ゲエズ)、サバ語)についても教えます。

●主な著書・論文

“The Last Mamluk Princess, Her Endowment, and Her Family History,” *Orient* 54 (2019).
“Writing the Biography of Ibn Khaldūn,” in: Maribel Fierro and Mayte Penelas (eds.), *The Maghrib in the Mashriq: Knowledge, Travel and Identity*, Berlin 2021.
“Careers and Activities of *mamlūk* Traders: Preliminary Prosopographical Research,” in: Stephan Conermann and Toru Miura (eds.), *Studies on the History and Culture of Mamluk Sultanate (1250-1517)*, Göttingen 2021.

准教授 村井 恭子

MURAI Kyoko

専門分野 中国古代史、古代東アジア国際関係史

とくに唐朝と「周辺」諸勢力との関係、唐朝の「辺境」政策を中心に研究しています。従来は中国王朝を主としその影響力がどれだけ及んだかという研究が主体でしたが、近年では東部ユーラシア規模の視点からみることによって「中国史」の相対化がはかられています。わたしも東部ユーラシアの一勢力として隋唐王朝をとらえ、そのあり方を再検討しています。

●主な著書・論文

「河西と代北—九世紀前半の唐北辺藩鎮と遊牧兵—」『東洋史研究』第74巻第2号、2015年
「ウイグル可汗の承譜と唐宋漢籍史料—懐信と保義の間—」『東洋学報』第100巻第2号、2018年
「唐末五代鄂爾多斯及河東党項、吐谷渾相關石刻史料—研究状況の紹介と考察」『唐史論叢』29(2)、2019年
「唐代契丹の反乱と河北海運使の成立」古畑徹編『高句麗・渤海史の射程—古代東北アジア史研究の新動向』汲古書院、2022年
「王朝の興亡と皇后の運命—隋唐革命—」『アジア人物史』第2巻(第5章担当) 集英社、2023年

西洋史学



教育研究分野について

西洋史学には4名の専任教員が配置されており、古代から現代にいたるまで、それぞれの時代について専門的に掘り下げて研究を行うことが可能です。いずれの時代においても、研究史的確な把握と、自己の研究テーマをより広い問題関心や研究動向の中に位置づける幅広い知識、一次史料の読解が重要ですが、それらの習得を目指して自主勉強会、院生による読書会などがおこなわれています。近現代においてはアメリカ、アジア、日本も含めた国際的相互関係の把握にも努めています。

教員紹介

教 授 高田 京比子 TAKADA Keiko

専門分野 中世イタリア史

中世のヴェネツィアを中心に、イタリアの都市コムーネ(中世イタリアで栄えた自治都市、または自治都市政府のこと)の制度的発展を、市民の生活レベルから見直す試みを行っている。また、イタリア本土に領土を獲得する以前のヴェネツィアとヴェネト地方の諸都市との交流にも興味を持っている。大学院のゼミでは、広く西洋中世史の最近の研究動向を押さえるとともに、院生のテーマに合わせて史料講読や文献紹介なども適宜取り入れ、各自がそれぞれの研究を発展させられるよう指導している。

●主な著書・論文

“«Commissarii mei Procuratores Sancti Marci». Ricerche sulle competenze dell' ufficio della Procuratia di San Marco(1204-1270)”. *Archivio Veneto*, V serie, vol.CLXVI, 2006.
『イタリア都市社会史入門』(共著、第3章「支配のかたち」担当)、昭和堂、2008年
『中世ヴェネツィアの家族と権力』(京都大学学術出版会、2017年)

教 授 佐藤 昇 SATO Noboru

専門分野 古代ギリシア史

大きく次の3点に関心を持って研究をしている。第1は、紀元前5～4世紀のアテナイ政治社会史である。当時の社会の実情、制度運用の実体、レトリックの運用から、古典期アテナイに花開いた古代民主政の実相について分析、考察している。第2は、古典期からヘレニズム期にかけての東地中海国際関係史である。中小のポリスが林立し、異民族とも隣接する古代東地中海世界で、いかなる外交文化、制度が生まれ、どのように利用されていたのかに関心がある。第3に、神話歴史叙述の問題にも関心を持っている。神話、歴史がどのような政治社会情勢の中で記述され、どのように変容するのかに関心がある。

●主な著書・論文

『民主政アテナイの賄賂言説』(山川出版社、2008年)
『歴史の見方・考え方 大学で学ぶ「考える歴史」』1、2(編著、山川出版社、2018、2023年)
『岩波講座 世界歴史 第2巻 古代西アジアとギリシア ～前1世紀』(共著、岩波書店、2023年)
“Hellenistic Didyma and the Milesian Past”, *JASCA* 5 (2023).
“Inciting *thorubos* and narrative strategies in Attic forensic *speeches*”, in M. Edwards and D. Spatharas (eds.), *Forensic Narratives in Athenian Courts*, Abington, Oxon and New York, 2019.

教 授 小山 啓子 KOYAMA Keiko

専門分野 近世フランス史

これまで近世フランスは「絶対的」な王権を軸に中央集権化が進んだと考えられ、ヨーロッパの主権国家や国民国家の典型とされてきました。しかし近年の研究では、こうした見方を相対化する統治の実態が、様々な点から具体的に明らかにされつつあります。私はおもにフランス東南部の都市リヨンをフィールドとして、国王儀礼や都市祝祭、あるいは地方から王権への請願や交渉の分析を行い、近世の都市が王権や国家と切り結んでいた関係のあり方を地方の視点から考察してきました。史料として私が特に注目している都市議事録は、国王行政にとっても情報源であり、年代記と同様に王国の記憶の一部でした。この文書作成の担い手である都市エリート的心性や、都市アーカイヴズの成立・発展についても検討しています。近年は、16世紀のリヨンにおいて急増した移民と都市空間の変容についても研究を進めています。

●主な著書・論文

『フランス・ルネサンス王政と都市社会ーリヨンを中心としてー』(九州大学出版会、2006年)
«Les Immigrants et l'espace urbain de Lyon au XVIe siècle: une colonie florentine de Lyon», *French Studies* (v. 76-2, 2022).
『岩波講座 世界歴史 第15巻 主権国家と革命 一五～一八世紀』(共著、岩波書店、2023年)
『ウィーンとヴェルサイユヨーロッパのライバル宮廷1550～1780ー』(翻訳、刀水書房、2017年)

准教授 藤澤 潤 FUJISAWA Jun

専門分野 東欧・ロシア現代史

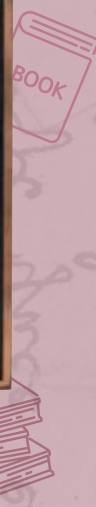
冷戦期のソ連と東欧諸国の相互関係について研究しています。東西対立が安定する1960年代以降、冷戦は体制間経済競争の様相を帯びるようになり、経済問題が冷戦の趨勢に影響を及ぼす重大な問題として浮上しました。そこで、経済問題、とくに資源・エネルギー問題を中心に、グローバルな冷戦の動向にも目を配りながら、1970年代から1980年代にかけてのソ連・東欧関係を分析しています。最近は、ゴルバチョフのペレストロイカと冷戦の終焉についても研究を進めています。

●主な著書・論文

『ソ連のコモン政策と冷戦:エネルギー資源問題とグローバル化』(東京大学出版会、2019年)
「経済開発の冷戦史:グローバル化する『対抗的近代』とその逆説」『ロシア史研究』102号、2018年、3～23頁
『ロシア革命とソ連の世紀 第3巻:冷戦と平和共存』(共著、岩波書店、2017年)
“The Soviet Union, the CMEA, and the Nationalization of the Iraq Petroleum Company, 1967-1979”, in Anna Calori, Anne-Kristin Hartmetz, Bence Kocsev, James Mark and Jan Zofka eds., *Between East and South. Spaces of Interaction in the Globalizing Economy of the Cold War*, Berlin, 2019, pp.59-84.



人文科学図書館



人文科学図書館には、人文科学系の資料を中心に、和漢洋の図書が約33万冊、雑誌約3,610種類等が所蔵されています(2024年3月末現在)。また、今では入手困難な古典の文献や、18世紀の原書(*Historia critica philosophiae*)や「正倉院文書」(写真複製)等の貴重なコレクションを有しており、研究や学習に活用していただけます。

館内設備の利用

・グループで相談しながら学習できる「ラーニングコモンズ」には、約50席分の可動式机と椅子、プロジェクターや大型モニターなどが備わっています(予約不要)。

提供サービス

・学内の他の図書館・室にある資料や、学外の資料も、人文科学図書館に取り寄せたり、訪問して利用したりすることができます。
・無線LAN設備が整っているため、持ち込みのノートパソコンを利用することができます(アカウントが必要)。

開館時間・サービス時間・休館日

	通常期		休業期	
	平日	土曜日	平日	土曜日
開館	8:45～19:00	11:00～17:00	8:45～17:00	—
文献コピー(コイン式)	8:45～19:00	11:00～17:00	8:45～17:00	—
レファレンス	9:00～17:00	—	9:00～17:00	—
マイクロ・NDLデジタル化資料	9:00～16:45	—	9:00～16:45	—
他大学図書館利用申込	お申込みは随時受け付けします。紹介状は訪問先に問い合わせ後、発行します(受け渡しは後日)。			
本・被写物申込(他大学から)	常時アカウントサービスで受付			
本・被写物受取(他大学から)	8:45～16:45	—	8:45～16:45	—

休館日

●日曜日・祝日 ●館内整理日(原則各月第2火曜日の13時まで) ●夏季一斉休業日(8月12日～16日) ●年末年始(12月28日～1月4日)
※臨時休館する場合はWEBサイトや掲示等でお知らせします。

学内図書館

・神戸大学には、人文科学図書館を含め9の図書館・図書室があり、学生は全ての図書館・室をそれぞれの条件で自由に利用できます。



最新情報と詳細はWEBページをご覧ください。
<https://lib.kobe-u.ac.jp/libraries/list/jinbun/>



知識システム論コース

Cognitive Studies

心理学



教育研究分野について

心理学教室では、感覚、知覚、運動、学習、記憶、言語、発達、社会的行動などの人間行動と、その背景にある心理を、観察、実験、調査を通じて実証的に研究しています。博士前期課程で修士論文を書いた学生は、後期課程で研究を続け専門研究者として活躍したり、前期課程修了時に就職し社会に出て活躍したりしています。人材育成にあたっては、研究成果の対外発信をとりわけ重視しており、研究成果を論文にまとめて学術誌に掲載することを前期課程から奨励し、後期課程修了までに複数の論文を国内外の学術誌に掲載するよう指導しています。



教員紹介

教 授 野口 泰基

NOGUCHI Yasuki

専門分野 認知神経科学

専攻は脳内における視覚情報処理です。私たちが日常生活で常を感じている視覚的表象(イメージ)が、脳内の神経細胞(ニューロン)の電気活動からどのように形成されるかを調べてきました。最終的には記憶や注意など、より高次な心のはたらきにも注目し、それらが電気活動という物質的な現象からどこまで説明され得るのか、ということを明らかにしたいと考えています。

●主な著書・論文

Noguchi Y., Fujiwara M., Hamano S. (2015). Temporal evolution of neural activity underlying auditory discrimination of frequency increase and decrease. *Brain Topography*, 28:437-444.
Noguchi Y., Kimijima, S., Kakigi, R. (2015). Direct behavioral and neural evidence for an offset-triggered conscious perception. *Cortex*, 65, 65:159-172.
Tachibana, R., & Noguchi, Y. (2015). Unconscious analyses of visual scenes based on feature conjunctions. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 41(3), 639-648.

准教授 柳澤 邦昭

YANAGISAWA Kuniaki

専門分野 社会心理学・社会神経科学

社会的排斥という現象について多角的に研究を行っている。人は社会的動物であるため、他者に拒絶されたり、仲間はずれにされたとき、ところに痛みが生じる。このころの痛みが脳ではどのように処理されているのかMRI装置を用いることで検証している。より最近では、他者(知人や家族)が仲間はずれにされている場面を目撃した際、脳でどのような反応が生じるのかを検討している。神経科学、情報学といった心理学の周辺分野の技術を応用することで、社会とところの関係性を明らかにしたいと考えている。

●主な著書・論文

柳澤邦昭, 阿部修士 (2020)「神経科学と社会的認知」唐沢かおり(編)「社会的認知－現状と展望－」ナカニシヤ出版
Yanagisawa, K., Kashima, E. S., Shigemune, Y., Nakai, R., & Abe, N. (2021) Neural Representations of Death in the Cortical Midline Structures Promote Temporal Discounting. *Cerebral Cortex Communications*, 2(2), tgab013.
Yanagisawa, K., Abe, N., Kashima, E. S., & Nomura, M. (2016). Self-esteem modulates amygdala-ventrolateral prefrontal cortex connectivity in response to mortality threats. *Journal of Experimental Psychology: General*, 145(3), 273-283.

助 教 ターン 有加里ジェシカ

THAM Yukari Jessica

専門分野 社会心理学

社会的場面における人々の認知や行動に関心があります。特に、人々が集団内で資源や負担を分け合うとき、どのような分け方を公平だと見なし、実際にはどのように分けるのかについて、実験や調査などを通じて検討しています。

●主な著書・論文

Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K. (2022). Social rewards in the volunteer's dilemma in everyday life. *Asian Journal of Social Psychology*, 25, 117-125.
Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K. (2022). Who incurs a cost for their group and when? The effects of dispositional and situational factors regarding equality in the volunteer's dilemma. *Personality and Individual Differences*, 185, 111236.
Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K. (2021). The effect of impression formation on rejection in the ultimatum game. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 12(1), 12-17.

言語を主とする知的活動や、行動・知性を背後で支える感情・感性を、伝統的人文学の範囲を超えた科学的視点から理解し、新たな人間観の形成に寄与する人材を養成します。

言語学

教育研究分野について

言語は人間の本質に関わる重要な現象である。この言語が、どのような構造を持ち、どのような機能を果たし、どのように習得され使われているのかを研究するのが経験科学としての言語学である。言語学には、日本語、英語など個別言語の研究とともに、音声学、音韻論、統語論、意味論、語用論、応用言語学などの幅広い分野が含まれる。音声学・音韻論は、言語における音の体系や規則性に関して研究をし、統語論では語をどのように組み合わせて文を作るかを考察する。意味論は語や文の意味を研究し、語用論は推論やコンテキストと関わる意味について研究する。応用言語学は言語の教育方法などについて考える。理論的には生成文法や認知言語学などのいくつかのアプローチがある。

教員紹介

教 授 岸本 秀樹

KISHIMOTO Hideki

専門分野 言語学(統語論)

主な研究課題として、語彙と句構造の研究。文法関係と語彙項目の関係を決める要因にはどのようなものがあり自然言語にどの程度異なる文法関係が許されるかということについて調べている。また、句構造の研究では、言語を構成する統語的な基本単位である句構造の性質を明らかにし、それが普遍文法に於いて果たす役割について研究している。大学院のゼミでは、ディスカッションを通じて、言語学の考え方、分析方法などを学び、各自のテーマにあった方法論について考えてゆ�ために、統語論、語彙意味論の論文を読んでいる。

●主な著書・論文

“Split intransitivity in Japanese and the unaccusative hypothesis.” *Language* 72, 1996.
“Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese.” *Linguistic Inquiry* 32, 2001.
“Wh-in-situ and movement in Sinhala questions.” *Natural Language and Linguistic Theory* 23, 2005.
『ベーシック生成文法』ひつじ書房、2009

教 授 田中 真一

TANAKA Shinichi

専門分野 言語学(音韻論・音声学)

言語音声(音韻論・音声学)を中心に研究している。日本語(東京方言・諸方言)や諸言語(イタリア語等)のアクセント・リズム現象の分析を通して法則性を明らかにするとともに、言語間および言語理論との関係を解明することを目標としている。近年関心を持っている研究テーマは以下の通りである。(1)複合語アクセントの調査・分析、(2)借用語音韻論(別の言語から語を取り入れる際の音韻操作)、(3)方言音声(名古屋・大阪方言)の実態調査・分析、(4)音声基礎研究で得られた知見の日本語教育への応用。

大学院のゼミでは、音韻論・音声学に関する文献を読むことを通して、言語分析の方法や自分の研究への活かし方を議論している。

●主な著書・論文

『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』(くろしお出版、2008年)
『日本語の発音教室－理論と練習』(共著・くろしお出版、1999年)
『漢語の言語学』(共著・くろしお出版、2010年)
The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants (分担・Oxford University Press, 2017年)

教 授 リチャード・ハリソン

Richard HARRISON

専門分野 教育学・日本語教育・言語学

イギリス人です。イギリス、オーストラリア、日本で日本語を教えました。自分が元留学生ですので、いつも学習者の立場から日本語学習を見ており、毎日新しい発見があります。専門は教育学で、常に語学教育をより面白くて楽しいものにするため、社会構成主義という理論を中心にコンピュータで何ができるかを考えています。もっと学習者の学習行動、最適な学習環境構築などを考えていかなければならないと思っています。一緒に考えて行きませんか？

●主な著書・論文

Larke R, Harrison R, (2000) WebQuests, Remei Publishing, Tokyo (in Japanese)
Harrison, R. (1997) 'Using Digital Video for Listening Comprehension' in Debski, R. et.al.(Eds) Language Learning Through Social Computing, Applied Linguistics Association of Australia Occasional Papers, No.16, pp99-107
Toyoda, E., Harrison, R., (2002) CATEGORIZATION OF TEXT CHAT COMMUNICATION BETWEEN LEARNERS AND NATIVE SPEAKERS OF JAPANESE, Language Learning & Technology, Vol. 6, No.1, pp. 82-99

教 授 澤田 治

SAWADA Osamu

専門分野 言語学(意味論・語用論)

スケール性、感情表出性、主観性、推論、情報構造等と関わる言語現象に焦点を当てて、(a)言語の意味とコンテキストとの関係とは何か、(b)言語の構造と意味の間にはどのような相互関係があるのか、(c)話者の主観・評価が関わる表現の意味はどのように理論的に分析できるのか、(d)言語の個性と普遍性とは何か、といった問題について考察している。大学院の演習では、論文を精読し、意味論・語用論および関連分野における理論や方法論を学ぶと同時に、各自の研究テーマ・課題を深められるよう、ディスカッションやプレゼンテーションの機会を多く設けている。

●主な著書・論文

Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers: The Semantics-Pragmatics Interface (Oxford Studies in Theoretical Linguistics), Oxford: Oxford University Press, 2018.
“An utterance situation-based comparison.” *Linguistics and Philosophy* 37, 2014.
“The comparative morpheme in Modern Japanese: Looking at the core from ‘outside’.” *Journal of East Asian Linguistics* 22, 2013.
“Pragmatic aspects of implicit comparison: An economy-based approach.” *Journal of Pragmatics* 41, 2009.

芸術学

教育研究分野について

現代における芸術文化領域の多様化は、また人間の感性的経験の多様化でもある。本研究分野は、こうした多様化する芸術文化について、伝統的な学問研究方法をふまえた上で、新たな学問の地平を切り開き、来るべき芸術表現の理論的基礎づけを行うとともに広範な視聴覚文化の包括的研究をめざす。具体的には、芸術の各ジャンルの成立の通時的・共時的状況、素材と構成・内容と形式の相互関係、新たなメディアによる芸術形態や芸術編成の変化等を扱う。

教員紹介

教 授 長坂 一郎 NAGASAKA Ichiro

専門分野 デザイン理論

「デザインする」という行為について理論・実践の両面から研究している。これまでのデザインの中心概念であった「機能」のあり方を問い直し、「デザインすること」と「使う」ことの間にある調和と逸脱を考察することによって、人間中心主義に代わるデザイン理論の可能性について考察している。また、デザイン対象物の「動き」がもたらす効果についての実証的な研究も行っている。

●主な著書・論文

『クリストファー・アレグザンダーの思考の軌跡ーデザイン行為の意味を問う』、彰国社、2015。
クリストファー・アレグザンダーの後期理論の思想的背景、日本建築学会計画系論文集、78(686):925-933, 2013。
長坂一郎、(2016)、ファッションデザイナーにとって工学的設計論が意味するもの、日本感性工学会論文誌、15(5)、609-614。
I. Nagasaka and N. Nishino. (2017). Formal criteria for the classification of service based on the Value-Creation Model, *Procedia CIRP*, 62, 74-77.

教 授 大橋 完太郎 OHASHI Kantaro

専門分野 芸術学・表象文化論

17世紀以降のフランス近現代を中心に、世界や社会のなかで感性的なものや美的なものが果たす役割を理論的に考察している。キーコンセプトは、「身体」「視覚／触覚」「百科全書」「食」「動物」など。具体的な作品やテキストを主たる分析対象にして、芸術作品や芸術的な行為のなかに人間が人間であるための不可欠な条件を見出せるのではないかと考えている。

●主な著書・論文

『ディドロの唯物論』(法政大学出版局、2011年)
『他者をめぐる人文学 グローバル世界における翻訳・媒介・伝達』(共編著、神戸大学出版会、2021年)
「ミシェル・フーコーの思考における芸術の非人間性について」(『美学芸術学論集』第12号、2016年)
「『シン・ゴジラ』の予告する世界:生命とその影」(『ユリイカ』、48巻20号、2016年)
カンタン・メイヤスー『有限性の後で』(共訳、人文書院、2015年)
リー・マッキンタイア『ポストトゥルース』(共訳、人文書院、2020年)
ジャック・デリダ『スクリッブル』(月曜社、2020年)



講 師 小寺 里枝 KODERA Rie

専門分野 芸術史・芸術理論・美学・テキストとイメージ

これまで19世紀末から20世紀半ばのフランスを中心として、視覚芸術(イメージ)と言語芸術(テキスト)の交叉、芸術と学術の交叉を、芸術史的な観点から考察してきました。根底にあるのは、人間の生における明晰判明ではない次元への問いです。「芸術」という概念の変遷史を辿り、具体的な作品や事象の歴史的・理論的考察をおこないながら、曖昧な次元を明晰判明なものへと還元してしまうことなく、終わりのない問いとして考え続けてゆきたいと思っています。

●主な著書・論文

『レアリズム再考:諸芸術における〈現実〉概念の交叉と横断』(共著、「画家と写真機——ジャン・デュビュッフェによる「現実」の探求」、382~411頁)、三元社、2023年
«Matérialité, Imagination, Image: Repenser la relation entre Jean Dubuffet et Gaston Bachelard à travers leurs pensées sur l'art», BIGAKU (The Japanese Journal of Aesthetics in Western Language), No.26, 2022, pp. 17-25
「物質と精神の交叉点としての絵画——ベルクソン哲学をとおしてみるジャン・デュビュッフェの芸術理念と実践」、『哲學研究』、第606号、2021年、65~114頁

学会・研究会と刊行物(1)

学会・研究会と刊行物の紹介ページはこちら



『愛 知』

神戸大学哲学懇話会

神戸大学の哲学関係教員、卒業生、学生等から構成される「神戸大学哲学懇話会」では、会誌『愛知』を1984年以来ほぼ毎年のペースで刊行し、2024年の段階で通刊33号を数えるに至っています。(他大学を含めた)教員や大学院生による論文・研究会ノート・翻訳等査読の上掲載し、新たな哲学の場を形成するべく努めています。

博士課程の学生にとっては、自らの新しい研究成果を提示する貴重な場となっています。



『国文学研究ノート』

神戸大学「研究ノート」の会

『国文学研究ノート』は、昭和47年、卒業生と在学生によって創刊された国文学の雑誌です。発行母胎は神戸大学『研究ノート』の会で、運営・編集はすべて卒業生と学生の会員のみで自主的に行われ、現在通巻61号になっています。

創刊当時は、国文学専門の発表機関は文学部になく、この雑誌が大きな役割を果たしました。神戸大学の学生と卒業生の見識の高さをあらわすもので、この雑誌も広く学界に知られています。



『国文論叢』

神戸大学文学部国語国文学会

『国文論叢』は神戸大学の文理学部における国語研究・国文学研究そして国語教育の研究成果を公表する学術雑誌として昭和28年6月創刊されたものです。その後文理学部の改組等で一時中断しましたが、昭和57年3月に、改めて神戸大学文学部国文学専攻の雑誌として復刊されました。現在は『国文論叢』は神戸大学文学部国語国文学会を発行母胎として、創刊以来の名称と号数を継承して、現在通巻60号、会員外にも海外を含む約300の大学・研究機関に送付され広く学界に認知されています。



『EBOK』

神戸大学仏語仏文学研究会

1988年、フランス文学専攻の大学院生を中心に創刊された本研究誌は、現在に至るまで編集作業のすべてを院生の責任で行っています。その間、フランス文学の今を常に意識した院生や教員たちによるきわめて刺激的な論文や翻訳などが掲載されてきました。ジャッジ制の導入、論文掲載後の読書会や討論会などのお陰で、論文の質はきわめて高く、この研究誌を足がかりに数多くの研究者が生まれています。KOBEを転倒させた誌名は、凡庸な読みを拒否する心意気のあらわれです。



『神戸英米論叢』

神戸英米学会

『神戸英米論叢』は、神戸大学文学部・文学研究科・文化学研究科において主に英米文学・英語学・言語学に関わる教員、院生、学生、卒業生等を中心として組織され運営される神戸英米学会の学会誌として、平成元年に宮崎先生退官記念号と題して、創刊号を発行。以来毎年着実に発行を重ねてきました。そして、創刊以来、7冊の退官記念号を発行しつつ、質の高い論文を掲載しています。



『未 名』

中文研究会

1982年創刊。鲁迅を中心として北京で結成され、外国文学の翻訳と紹介に注力した文学結社「未名社」に由来して命名されました。1997年には「中国文学に関する学術研究」の実績にたいして財団法人橋本循記念会より「盧北賞」を受賞しています。中国文学および中国語学に関する論文のほか、翻訳、校注、書評などをあつめ、毎年一冊刊行して全国の中文研究会会員に送付しています。

社会文化論コース

Social Culture

フィールドワークを通して現代社会の動態を調査分析し、社会構造と文化形象との相互関連という視点から、現代社会の諸問題、地域の固有文化・造形文化の変遷を巡る諸問題を国際的視野のもとに解明することにより、社会文化の形成に寄与できる人材を養成します。



教育研究分野について

家族、農村、地域社会、都市といったコミュニティが構成する社会の基層構造を、日本、アジア、欧米、ラテンアメリカなど様々な国・地域の比較文化研究を通じて明らかにする。また、アソシエーション、ネットワーク、個人の創発的活動を包含する現代社会が、グローバルな交流と地域的な固有性の多面的な動きのなかでどのように新しい文化価値を形成していくかを解明する。

こうした作業を通じ、変動する現代社会の先端的諸現象に積極的にアプローチし、近代が継承してきた社会理論への深い考究とその再構築に向けての創造的理論活動を推進するとともに、フィールドワークによって社会動態と変容の具体的な様相を実証的に明らかにする。

教員紹介

教授 白鳥 義彦
SHIRATORI Yoshihiko

専門分野
社会学

これまで、デュルケームを中心とするフランス社会学の理論的研究、フランスにおける社会学の制度化の重要な背景としての第三共和政期の高等教育改革に関する研究、また近代国家形成と高等教育との関係についての日仏比較研究などを進めてきた。最近は、現代につながる幅広い文脈の中で、特にフランスを事例としながら研究や教育の制度的考察、社会における「知識」や「文化」のありかた、移民をめぐる問題などにも関心を寄せている。

●主な著書・論文

「デュルケームの大学論—第三共和政の高等教育改革との関連で—」(『社会学評論』181、1995年)
『大学界改造要綱』(共著、藤原書店、2003年)
クリストフ・シャルル著『「知識人」の誕生 1880—1900』(翻訳、藤原書店、2006年)
リュック・ボルタンスキー、エヴ・シャペロ著『資本主義の新たな精神』(上・下) (共訳、ナカニシヤ出版、2013年)
『大学事典』(項目執筆、平凡社、2018年)
『3STEP シリーズ [1] 社会学』(共編著、昭和堂、2020年)
『社会学の基本 デュルケームの論点』(共著、学文社、2021年)

教授 平井 晶子
HIRAI Shoko

専門分野
家族社会学・人口学

家族とは何か、私たちの家族生活はどのようにして今あるかたちになってきたのか、いかにすれば多忙な現代社会のなかでワークライフバランスを保てるのか。これらの課題を考えるにあたり、近世から現代までという300年のタイムスパンで家族の変化を考察し、現代を歴史的に位置づけるとともに、人口学的方法を駆使し、マクロ／ミクロ両面からの実証分析を展開する。近年は東アジアとの比較も積極的に進めており、歴史というタテ軸に加え、比較というヨコ軸からも、目の前の家族を相対化し、現代家族を読み解く試みを続けている。

●主な著書・論文

『くわたし>から始まる社会学—家族とジェンダーから歴史、そして世界へ』(共編、有斐閣、2023年)。
Japanizing Japanese Families: Regional Diversity and the Emergence of a National Family Model through the Eyes of Historical Demography. (共編、Brill、2023年)。
『結婚とケア—リーディングス アジアの家族と親密圏 第2巻』(共編、有斐閣、2022年)。
『家と子どもの社会史—日本における後継者育成の研究』(共著、吉川弘文館、2022年)。
『外国人移住者と「地方的世界」』(共編、昭和堂、2019年)。
『出会いと結婚』(共編、日本経済評論社、2017年)。
『日本の家族とライフコース』(ミネルヴァ書房、2008年)。

准教授 佐々木 祐
SASAKI Tasuku

専門分野
ラテンアメリカ社会研究・移民論

メキシコおよび中央アメリカをフィールドに、歴史的・社会的に周縁化されてきた人々の経験を対象に研究を行っている。近年は、中南米・カリブ地域からアメリカ合衆国へ向かって移動と滞留・還流を繰り返す人々に注目して不安定な移動を続けながら形成される社会関係や文化実践について調査をしている。また、兵庫県豊岡市や神戸市・阪神北地域に在住する外国人住民の生活や教育・就労、支援体制などに関する調査研究も行うようになっている。

●主な著書・論文

『1%の隣人達：豊岡発！外国人住民と共に生きる地域社会』(共編、昭和堂、2024年)
『「新しい人間」の詩学：80年代ニカラグア「ボエシア・リブレ」と「ニカラウアック」』(『思想』、1187号、2023年)
「まだ見ぬ「われわれ」を創造する—中米移民の集合的実践の事例から」(『集合的創造性』、世界思想社、2021年)
「移動と暴力が交錯する生—メキシコにおける中米女性移民たち」(『ジェンダー暴力の文化人類学』、昭和堂、2021年)
「韓国における「多文化家族」支援制度—地域社会を生き抜く外国人女性たち」(『外国人移住者と「地方的世界」』、昭和堂、2019年)
『ニカラグアを知るための55章』(共著・うち5章を執筆、明石書店、2016年)

准教授 黒田 千晴
KURODA Chiharu

専門分野
比較・国際教育学

改革開放以降の中国の高等教育改革、特に高等教育の国際化に向けた動向、国際教育政策に興味を持ち、比較・国際教育学視点から研究を進めてきた。現在は、グローバル化が東アジアの高等教育システムにもたらすインパクトを、留学生移動、英語を教授言語とする学位プログラムの展開、国際教育連携の諸相及び国際高等教育における教育の質保証等の観点から比較、検証している。また、国際教育プログラムの学習成果の評価、学生のキャリア形成に与えるインパクトについても関心を持っている。

●主な著書・論文

Encyclopedia of International Higher Education Systems and Instituti (分担執筆、Springer、2019)
『留学生と共に学ぶ国際共修—効果的な授業実践へのアプローチ』(分担執筆、東信堂、2019年)
The New Sphere of International Student Education in Chinese Higher Education: A Focus on English-Medium Degree Programs (Journal of Studies in International Education, 18(5)、2014)

講師 梅村 麦生
UMEMURA Mugio

専門分野
理論社会学・社会学史

ドイツ語圏の社会システム理論、現象学的社会学などの社会学理論・学説研究をもとに、「社会を社会たらしめるものは何か」(高田保馬)について、「社会のなかで、社会から」(ニクラス・ルーマン)考えています。現在は「時間のあり方の違いが社会や人間関係のあり方に違いをもたらす」(ジョルジュ・ギュルヴィッチ)という時間の社会学や、何らかの社会現象に因果関係や責任関係を推定する社会学的帰属をめぐる論争、地域の外国人労働者などについて、研究を進めています。

●主な著書・論文

『地方発 多文化共生のしくみづくり』(共著、晃洋書房、2023年)
「社会学史はいかにして可能か」(『神戸大学文学部紀要』51、2024年)
『「社会学的言ひ訳」批判とはいかなる批判か』(『社会学雑誌』40、2023年)
「見田宗介(真木悠介)『時間の比較社会学』と死の意味論」(『現代社会学理論研究』17、2023年)



美術史学



教育研究分野について

美術史学とは、文字資料に対する視覚資料（イメージ）全体を扱う学問です。イメージは、文字で表現されるよりはるかに豊富なメッセージをもって、それを読み解くことによって、過去の人たちの考えや現代の文化の隠された意味や、思わぬ真実を探り出すことができるのです。作品が制作されたときの政治・経済・思想・社会的文脈に加え、それが現在にいたるまでのどのような意味を与えられて受容されてきたかを考えます。

地域・各時代・各民族による多種多様な造形の諸相を検証し、そこに様式の伝播、図像の伝承、意味の変容といった美術史的な問題について、様々な方法論を適用して考察します。そのためには多くの美術作品にじかにふれることが重要ですが、本大学院では、美術館・博物館と密接に協力し、現場を重視した実践的な教育研究を行っています。



教員紹介

教授 宮下 規久朗 MIYASHITA Kikuro

専門分野 西洋美術史および日本近代美術史

イタリアの画家カラヴァッジョを中心に、16世紀のカトリック改革期から17世紀のバロックにいたるイタリア美術を中心に研究してきました。また、美術における宗教と権力、死や性の表象といった視点から広く美術史全体を考察し、とくに幕末から昭和にいたる日本の近代美術や戦後アメリカの現代美術を調査・研究し、これらの成果を30冊以上の著書によって世に問うてきた。そのうち10冊ほどが中国語圏で翻訳出版されている。

大学院では、学生の関心に応じて様々な各国語文献を読み、ともに考える一方、美術館・博物館との密接な連携によって実作品にふれる機会を提供し、実証的な美術史学を習得させることに努め、多くの専門家を送り出している。

●主な著書・論文

『カラヴァッジョー聖性とヴィジョン』（名古屋大学出版会、サントリー学芸賞など受賞）、『バロック美術の成立』『イタリア・バロック美術と建築』（以上、山川出版社）、『食べる西洋美術史』『ウォーホルの芸術』『美術の力』（以上、光文社新書）、『刺青とヌードの美術史』（NHKブックス）、『カラヴァッジョへの旅』（角川選書）、『モチーフで読む美術史』『しぐさで読む美術史』（以上、ちくま文庫）、『ヴェネツィア』（岩波新書）、『闇の美術史 カラヴァッジョの水脈』『聖と俗 分断と架橋の美術史』（以上、岩波書店）、『そのとき、西洋では』（小学館）、『一枚の絵で学ぶ美術史』（ちくまブリーマー新書）、『聖母の美術全史』（ちくま新書）。

講師 野田 麻美 NODA Asami

専門分野 江戸狩野派を中心とする日本近世絵画史

2023年4月から神戸大学に参りました。その前は、群馬県立近代美術館、静岡県立美術館で計13年、学芸員として、江戸絵画に関する大きな展覧会を6本企画し、そのなかで、実際に作品に触れることで研究をしてきました。主な研究対象とする狩野派は、400年以上日本の画壇の中心にいた集団で、世界にも稀に見る流派です。その全貌を解明するため、日々、彼らの作品と向き合っています。

授業では、調査の写真などをまじえ、作品の魅力が何か、受講生たちに考えてもらえるように、工夫を凝らしているところです。作品に触れ、考える喜びを追求し、従来の絵の見方を変えるような展覧会を企画できる学芸員を育成することが目標です。

●主な著書・論文

『狩野山楽筆『車争図屏風』（東京国立博物館）に関する一考察ー『年中行事絵巻』との関係を中心に』（『美術史』167号 2009年）、『探幽3兄弟展ー狩野探幽・尚信・安信』（板橋区立美術館・群馬県立近代美術館 2014年、共著）、『美しき庭園画の世界ー江戸絵画にみる現実の理想郷』（静岡県立美術館 2017年、編著）、『幕末狩野派展』（静岡県立美術館 2018年、編著）、『江戸狩野派による雪舟学習をめぐる諸問題ー做古図の分析から』（『天開圖畫』11号 2019年）、『忘れられた江戸絵画史の本流ー江戸狩野派の250年／江戸狩野派の古典学習ーその基盤と広がり』（静岡県立美術館 2021年、編著）、『鞆川図と蘭亭曲水図ーイメージとテキストの交響』（勉誠出版 2023年、編著）

地理学



教育研究分野について

地理学は「空間」に関わる事象全般を研究対象とする間口の広い学問であるが、本研究分野ではそのなかでも歴史地理学、社会地理学、文化地理学に焦点をあてている。風景／景観やそれらが描かれた絵図や地図、場所感覚や地域経験など生活空間における社会集団の地理的経験に対し、文書・統計・地理情報の収集・分析や聞き取り調査などの方法を駆使して接近し、そこから様々な空間的課題を読み解いていくのである。院生の主体的なテーマおよびフィールド設定を尊重しつつ、理論・方法論的な潮流を踏まえ、フィールドワークを重視した質の高い修士・博士論文を完成できるよう指導を行う。



教員紹介

准教授 原口 剛 HARAGUCHI Takeshi

専門分野 社会地理学、都市論

フィールドワーク研究と理論研究という二つの方法から、現代都市の社会地理を探究しています。フィールドワーク研究では、寄せ場として知られる大阪の釜ヶ崎や港湾の戦後史、野宿者のコミュニティなどをフィールドとする研究を重ね、社会・空間的排除のメカニズムの解明や社会運動の動態の記述を目指してきました。また、理論研究の面では、アンリ・ルフェーヴルやデヴィッド・ハーヴェイなどの思想を手がかりとして、ジェントリフィケーションやロジスティクスといった現代的事象の把握を試みました。これらの視点から、現代都市社会を総合的に捉え、批判的に記述することを目指しています。

●主な著書・論文

『叫びの都市ー寄せ場、釜ヶ崎、流動的下層労働者』洛北出版、2016年
ニール・スミス『ジェントリフィケーションと報復都市ー新たな都市のフロンティア』（原口剛訳）、ミネルヴァ書房、2014年
『Marxism and Urban Culture』（共著）、Lexington Books、2014年
『釜ヶ崎のススメ』（共編著）、洛北出版、2011年

准教授 菊地 真 KIKUCHI Makoto

専門分野 文化財学（博物館学）・歴史地理学

地理学では、おもに先史時代の歴史地理学を研究してきました。歴史地理学の中でも、環境史との接点も多い「人間と地理的環境の関わり」に注目しています。過去から現在という長い時間のなかで、人間が土地にどのように棲みつき、生業を営んで変遷してきたのか。また近世近代以降の都市と景観について、古地図や建造物、遺跡などにに基づき、土地の履歴という観点を交えながら、人間活動と環境の動態について研究を進めています。

文化財学では、非正規学芸員や指定管理者制度ほかの博物館運営上の問題、歴史・美術展示のあり方、博物館資料をめぐる諸課題などに関心があります。また史跡等、文化財の保存活用、資料保存の問題についても取り組んでいきたいと考えています。

●主な著書・論文

『地域の探求と学び』『兵庫地理』66、2021年
『採用募集情報に基づく非正規学芸員の動向』『博物館学雑誌』43-2、2018年
『古地理復元の高分解能化と課題』『神戸大学文学部紀要』44、2017年
『創る、美術と展示ー「おやこでえほんづくり」展の現場からー』『MOUSEION』59、2013年

文化資源論（後期課程のみ）



教育研究分野について

文化財学・文化資源学に関する実証的・応用的な研究を行います。日本有数の重要な美術館・博物館である大和文華館および奈良国立博物館と連携し、実際の博物館運営や文化財保存方法を学ぶことができます。さらに、最先端の科学的調査法を習得し、各地の調査現場における文化財調査を体験することにより、情報と人材のネットワークを構築できる学識の幅広さと応用力を身につけさせ、博物館・美術館・自治体において文化財保全・文化財行政を担当できる高度な知識を持った人材を養成します。



教員紹介

客員教授 **岩井 共二** IWAI Tomoji

専門分野 **東アジア仏教美術史**

1968年生まれ。愛知県出身。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程中退。1994年から2012年まで山口県立美術館に勤務。2012年8月から奈良国立博物館に勤務。教育室長を経て、2015年4月より学芸部情報サービス室長。専門は、東アジア仏教美術史。仏像の着衣形式のあり方から、東アジアにおける仏像様式の伝播と受容・変容のあり方を探っている。博物館では、仏像の着方を理解してもらうための「仏像コスプレ」のイベントを企画して、仏像の理解に務めている。「文化資源論」では、博物館の使命である「研究・収集・保管」の成果を、(集客も含めて)「展示」にどう活かすのか。自らの経験を含めて、皆さんと考えていきたい。

●主な著書・論文

「高麗後期の如来・菩薩の服制について」(『高麗・李朝の仏教美術展』山口県立美術館、1997年)
「中国南北朝時代における如来像の中国式服制出現に関する試論」(『汎アジアの仏教美術』中央公論美術出版、2007年)
「中国魏晉南北朝時代仏教美術における中国化の意義」(『山東省石仏展』山口県立萩美術館・浦上記念館、2008年)

客員教授 **谷口 耕生** TANIGUCHI Kosei

専門分野 **日本仏教絵画史**

奈良国立博物館学芸課美術室研究員として、約20年にわたり、日本における仏教美術の保存、公開、研究の中核かつ最先端に位置する同館において、展覧会、調査研究、保存修理といった美術史学研究における「現場」が担うべき多くの業務を経験している。展覧会、調査研究活動のみでなく、保存修理担当として、同館の文化財保存修理施設の運営にも携わり、我が国における文化財修理の現状についても考察している。研究活動では、天平時代における仏教絵画、そしてそれを復興的に受容した平安時代から鎌倉時代の南部における仏教絵画について、その様式、宗教的背景、絵師の問題等をめぐって、多くの新たな資料を見出すとともに多面的に考察している。

●主な著書・論文

『国宝 絹本着色十一面観音像』(中央公論美術出版、2006年)
『薬師寺所蔵 国宝 麻布著色吉祥天像』(中央公論美術出版、2008年)
「俱舍曼荼羅と天平復古」『仏教美術論集1 様式論—スタイルとモードの分析』(竹林舎、2012年、平成25年度国華賞受賞)
『大徳寺伝来五百羅漢図』(思文閣出版、2014年)
『信貴山朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻 調査研究報告書—研究・資料編』(奈良国立博物館・東京文化財研究所編、2020年)

奈良国立博物館



奈良国立博物館は、仏教美術を中心とした文化財について、収集・保管・展示、調査研究、教育普及事業を行うことを目的として明治22年(1889)に設置され、同28年(1895)に開館し、開館120年を超える。この間、当館では、東大寺、興福寺、春日大社などに囲まれた奈良公園の一角にあって、よい環境を生かし、施設の充実を図りながら、寺院・神社をはじめとした文化財所有者の協力を得て、特に仏教と関わりの深い古美術品や考古資料などの文化財の保存を図り、調査・研究を行うとともに、展示を通してそれらの魅力と、背景にある豊かな歴史・文化を伝えてきた。また、仏教美術資料研究センターでは文化財に関する情報資料の収集・提供・研究を、文化財修理所では国宝等の美術工芸品の保存修理と、それに伴う調査研究を行っている。

明治になり、維新の社会改革による欧化主義風潮、廃仏毀釈等の動きによって、伝統的文化財、特に奈良及び京都で神社・寺院に伝えられた仏像など仏教に関する文化財は、散逸や毀損が著しくなったが、一方でその保存と国民への公開が強く要望された。

このため宮内省は、明治21年(1888)に臨時全国宝物取調局を設けて全国の社寺の宝物調査を行うとともに、翌22年(1889)に帝国博物館として東京、京都、奈良に三館の設置を決めた。制度上の変遷を経て、昭和27年(1952)8月1日より奈良国立博物館と称することとなり、また同43年(1968)には新設の文化庁附属機関となった。

奈良国立博物館施設は、明治27年(1894)に煉瓦造の本館が竣工、28年(1895)4月に開館した。その後各社寺からの寄託品の増加に伴い、昭和12年(1937)に収蔵庫を新設した。次に昭和41年(1966)には新陳列館(現西新館)の建設が決定され、47年(1972)に竣工、近代的な博物館としての機能を持つ展示・収蔵スペースの拡充が実現した。また、研究の各分野において学術情報資料の共同利用と情報システムの開発が急速に進む中で、昭和55年(1980)に仏教美術資料研究センターが設置された。平成元年からは同センターとして、明治35年(1902)に建てられ重要文化財として指定され、当館の所属となった旧奈良県物産陳列所を利用している。平成5年(1993)には博物館施設の更なる充実及び入館者対象の文化財学習機能などの改善を図るため、新たな陳列館等施設の建設が決定され、同9年(1997)東新館及び地下回廊が竣工、さらに、文化財の保存・修理を行う本格的な施設を持ちたいという奈良国立博物館の積年の要望から平成10年(1998)には文化財保存修理所建設が決定され、12年(2000)末に竣工、平成14年(2002)2月開所した。当館は、従前から仏教美術を中心とした文化財について、収集・保管・展示、調査研究及び教育普及事業を行ってきたが、近年は、展示の充実はもとより、平成4年度より親と子の文化財入門教室を開始、同9年度に解説ボランティア制度を創設、11年度には来館者用端末機・高精細大型画像システムの設置と12年度に図書コーナー等を設置し、新たな教育普及事業・学習環境の整備も行っている活動の充実を図っている。

そして、平成13年(2001)4月から、行政改革の一環として、奈良国立博物館は、他の国立博物館と同様に独立行政法人国立博物館の設置する博物館として、新たなあゆみを開始した。

・所在地 〒630-8213 奈良市登大路町50番地

Tel 0742-22-7771

大和文華館



財団法人大和文華館は、日本美術及び関係諸文化に関する資料を蒐集し、その研究及び鑑賞を奨励し国民の教養と新しい文化の創成に資するとともに、世界の文運に寄与し人類の平和と親睦とに貢献することを目的として、昭和21年(1946)に当時の近鉄社長で美術館構想の発案者種田虎雄氏を代表発起人として発足した。その後、昭和35年(1960)に近畿日本鉄道株式会社創立50周年記念事業のひとつとして奈良市学園南に美術館が開館し、美術館構想の実現を委嘱されていた矢代幸雄氏が初代館長となった。

所蔵品は、古代から現代にいたる日本・中国・朝鮮を主とした東洋の絵画・書蹟・彫刻・陶磁・漆工・金工・染織・硝子などの美術工芸品およそ2000件である。この中には「寝覚物語絵巻」・「一字蓮台法華経」・「婦女遊楽図屏風(松浦屏風)」・「李迪筆 雪中帰牧図」の国宝4件をはじめ、「佐竹本三十六歌仙絵小大君像」・「可翁筆 竹雀図」・「埴輪鷹狩男子像」・「高麗青磁九竜浄瓶」などの重要文化財31件、「阿国歌舞伎草紙」・「宮川長春筆 美人図」などの重要美術品14件が含まれている。コレクションの中核をなすのは、横浜在住の実業家で大蒐集家であった原三溪翁(富太郎)の旧蔵品である。また、これとは別に中村直勝博士蒐集文書(双柏文庫)664件、近藤家旧蔵富岡鉄斎書画コレクション143件、鈴鹿文庫(和書)約6162冊などを館蔵する。

展覧会は、館蔵品をさまざまな角度から選択してテーマごとに展示する平常展を1年に4回、特定の主題のもとに館内外の美術品を展示する特別展及び特別企画展を毎年4回開催している。また、美術に対する関心を高めるため、美術雑誌『大和文華』(昭和26年創刊、年2回発行)をはじめ、『所蔵品分冊目録』・『名品図録』・『特別展図録』などを出版している。

・所在地 〒631-0034 奈良市学園南1-11-6

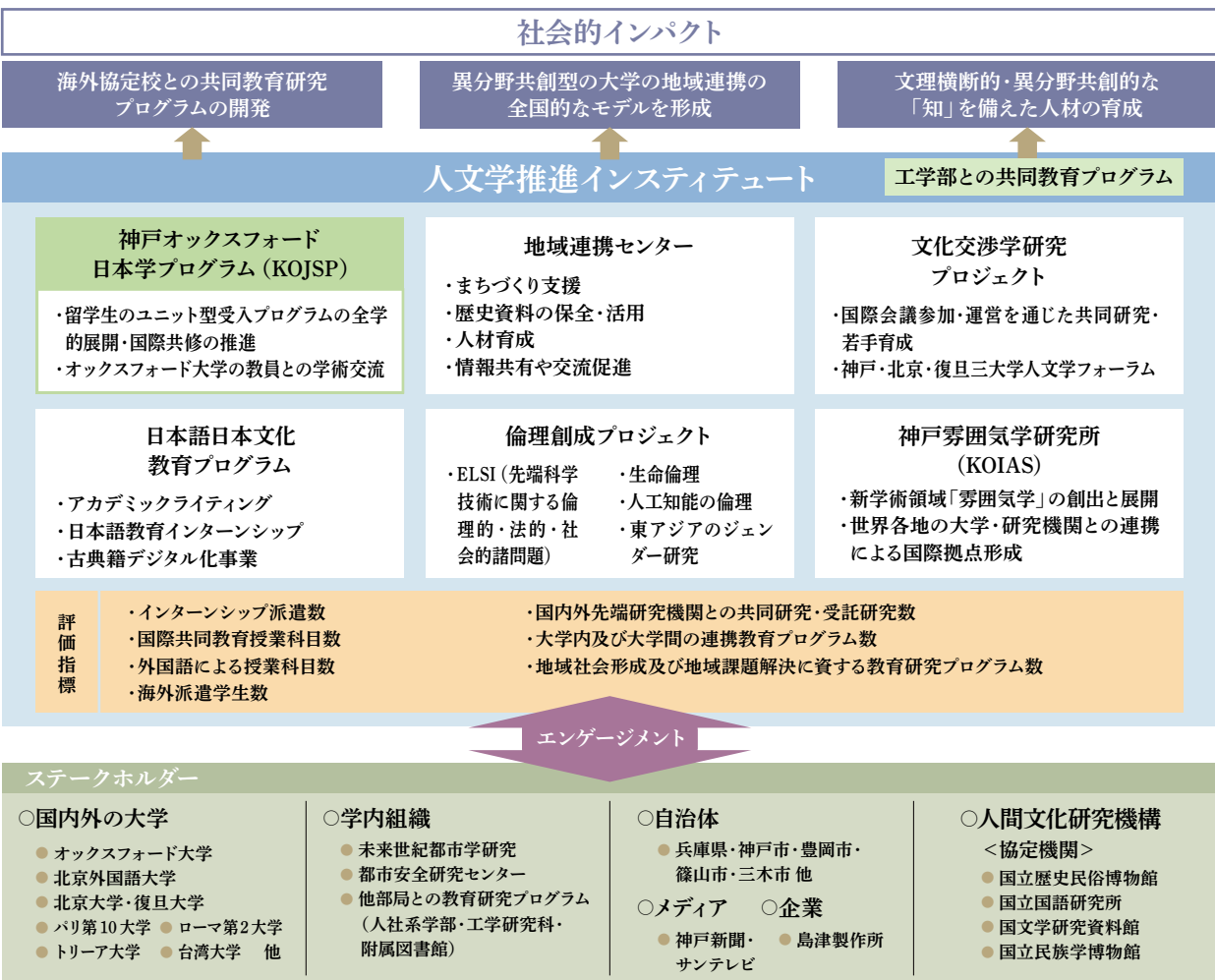
Tel 0742-45-0544

神戸大学大学院人文学研究科人文学推進インスティテュート

人文学研究科では、さまざまな組織が多彩なプログラムを運営しており、専門を横断して受講できる研究科共通科目を提供しています。

■ 設置目的

人文学推進インスティテュートは、研究科内の各センターやプロジェクトが進めている教育・研究・社会連携に関わる諸事業を推進し、国内外の大学や人間文化研究機構等の大学共同研究機関、自治体や地域社会等と組織的な協力関係を構築するとともに、人文学の現代的諸課題の解明に資する新たなプロジェクトを育成、発展させることを目的として設置されています。



コース以外の業務を担当する教員 (2024年4月現在)

■岡野 靖子 (おかの やすこ) ■専門分野: 第二言語習得、日本語教育

■プロフィール

日本語学習者のライティングに関心を寄せ、フィードバックの研究を行っています。日本人学生同様、日本語学習者にとっても、レポートや論文等を書くためのアカデミック・ライティング・スキルは欠かせません。そこで、このスキル向上に役立つとされる、学習者同士によるフィードバック活動を実践しています。学習者に生じた意識や取り組み方の特徴を探り、どのようなフィードバックを、いつ、何に、どのような方法で、どの程度行えば効果的なのか等を研究することで、ライティング指導や学習支援に役立てたいと考えています。文学部・人文学研究科では、日本人学生と留学生の交流促進を目的とした国際交流イベントの運営や広報業務を担当しているほか、これらの学生を対象に日本社会や文化に関する講義も行っています。

■主な業績 (論文)

- ・「第二言語学習者のライティングの対象としたピア・フィードバック研究の批判的考察—分析の観点に着目して—」『教育学研究ジャーナル』28, 53-62 (2023年)
- ・「ピア・フィードバックに対する日本語学習者の意識—書き手意識も視野に入れて—」『中国語話者のための日本語教育研究』13, 94-110 (2022年)

■大河内 瞳 (おおかわち ひとみ) ■専門分野: 日本語教育、教師教育

■プロフィール

私は、民間の日本語教師養成講座で日本語教育について学んだ後、タイの大学で日本語教師をスタートさせました。タイでは、文化的、慣習的、宗教的等の相違から、さまざまな壁にぶつかりました。特に私にとって難しかったのは、同僚の先生との人間関係でした。一緒に働く教師同士の関係がよくないと、学科の運営にも支障をきたしますし、よりよい教育を模索していくことも難しくなります。教育の質において重要な役割を担っているものの一つは教師です。そこで、“教師がハッピーでいられるようにするためにはどうしたらいいのか?”をテーマに、いかに教師の学びの共同体を作っていくか、子育てと仕事の経験からいかに教師としての専門性を発達させるかといったことを研究してきました。神戸大学では、これまでの国内外での日本語教師としての経験を活かし、主にオックスフォード大学からの留学生の支援を行っています。

■主な業績 (論文)

- ・「一人の日本語教師が自らの教師としてのあり方を見出ししていくプロセス—語り聴く場とオートエスノグラフィの往還を通して—」『言語文化教育研究』20, pp. 225-247 (2022年) (共著)
- ・「日本語指導が必要な児童生徒を対象とした日本語教育実習と実習を通した大学生の学び」『日本語教育』185, (2023年) (共著)

■岡野 翔太 (おかの しょうた) ■専門分野: 華僑華人研究、中国近現代史、近現代台湾研究、歴史人類学

■プロフィール

私は台湾出身の親を持つニューカマーの二世で、神戸で生まれ育ちました。台湾名は葉翔太といいます。これまで日本帝国崩壊後の「台湾系華僑」を研究の対象としてきました。「台湾」という存在は、日本の外交関係や台湾を取り巻く政治環境の影響から、この日本においても、それが政治実体としてあるのかないのか、人びとの論争の種となってきました。私自身も外のまなざしによって自らのアイデンティティが揺るがされるような経験をしました。こうしたことから、「台湾系華僑」に関心をもち、横浜中華街でのフィールドワーク調査や台湾での資料収集を行ってきました。今後も、「国」や「国境」、地域秩序の変化によって不可視化された人びとについて考えていきたいと思っています。

■主な業績 (著書・論文)

- ・『二重読みされる中華民国—戦後日本を生きる華僑・台僑たちの「故郷」—』(大阪大学出版会、2023年)
- ・「「存在しない国」と日本のはざまを生きる—台湾出身ニューカマー—第二世代の事例から—」(関信三ほか編『帝国のはざまを生きる』みづき書林、2022年)
- ・『「亡国」の越境者』の100年—ネットワークが紡ぐユーラシア近現代史—』(共編著、風響社、2020年)

地域連携センター (1)

地域連携センターは、地域歴史遺産の調査・研究の成果を活かし、自治体や住民団体等と連携して、地域の歴史文化を形成してゆく双方向型の事業を進めています。

基本事業は、①自治体・地域住民と連携したまちづくり支援事業や自治体史の編さん、②自治体・NGOとの協力による歴史資料の保全事業、③地域歴史遺産の保存活用機構の構築支援と人材育成事業、④地域の歴史文化をめぐる情報共有や交流の促進に向けた活動の4分野で進めています。これらの事業は、学部生や大学院生の研究活動や技能習得のための実践的な教育の場ともなっています。

地域連携センターでは、こうした事業の成果に基づき、人文学研究科共通科目として「地域歴史遺産活用研究(a)(b)」 「地域歴史遺産活用演習(a)(b)」 「地域歴史遺産活用企画演習」という授業を提供しています。

現在、地域社会では、歴史遺産や文化財を継承し、それをまちづくりに活用できる人材の育成が課題となっています。これらの授業はそうした課題に応え、地域歴史遺産



地域連携センターの主な活動 —自治体、市民、学生とともに—

■ 連携している自治体等

2023年度は、明石市、朝来市、加西市、三田市、丹波市、丹波篠山市、小野市、三木市、福崎町、神戸市文書館、大分県中津市との間で共同研究・受託研究等の契約を結び事業を行いました。

ほかに、兵庫県、尼崎市、淡路市、篠山市、たつの市、姫路市香寺町、猪名川町、佐用町等の自治体、市民との間で連携、協力して事業を行っています。

■ 地域歴史遺産活用研究・地域歴史遺産活用演習

授業科目「地域歴史遺産活用研究(a)(b)」 「地域歴史遺産活用演習(a)(b)」は、大学院人文学研究科(博士課程前期課程)の共通科目として開講されています。

地域歴史遺産活用研究(a)(b)は、地域連携センターのスタッフに加えて、自治体関係者、地域歴史遺産を活用したまちづくりを実践されている市民、それぞれの専門の立場から地域歴史遺産の保全・活用にかかわっている研究科外の研究者等を非常勤講師として招きながら、地域歴史遺産の考え方、その保全・活用の実践例、またそのために必要な技能等を学ぶ、オムニバス形式の授業として開講しています。

地域歴史遺産活用演習(a)(b)は、古文書の解読、整理、研究、活用の経験を積み、その技能を高めるため、事前指導を経た上で合宿形式の集中講義として行っています。例年は篠山市と三木市で地元

を保全・活用できる「地域リーダー」の養成を目指すものです。

ここでいう「地域リーダー」とは、ひとつは、将来、大学研究者・博物館員・文書館職員・NPO職員等として力を発揮するような「職業的リーダー」であり、もうひとつは、自治体職員・歴史ボランティア・地方マスコミ関係者・小中高の教員等、あるいは一市民として地域歴史遺産の活用を担う「地域住民リーダー」です。履修者が将来どのような職業に就いたとしても、つねに地域の歴史文化を担える能力と意欲を備えたリーダーになれるような教育プログラムになっています。

「地域歴史遺産活用研究(a)(b)」は、各地の地域歴史遺産の現状と課題を把握し、その活用のための基礎的知識と能力を身につける入門講義です。また「地域歴史遺産活用演習(a)(b)」は、地域歴史遺産の分類・整理・解読・活用などの実践的方法を学び取る専門的演習です。さらに「地域歴史遺産活用企画演習」は、その活用のための企画等を自治体関係者や地域住民と一緒に考案するような実践的演習です。

専門外コースの大学院生は、まず「地域歴史遺産活用研究(a)(b)」を履修した上で、自分の興味や関心にしたがって「地域歴史遺産活用企画演習」を履修することが望まれます(ただし後期課程の大学院生は「地域歴史遺産活用研究(a)(b)」を履修することはできません)。

■ まちづくり地域歴史遺産活用講座

近年各地で、地域歴史遺産を活用したまちづくりの取り組みが、住民自身の手で行われています。この講座は、こうした取り組みに関心を持つ市民のみなさんに向けて、地域の歴史についての考え方、学び方、活かし方を学ぶ機会を提供する試みです。例年、講座は学内や県内各地で実施しています。



受講された市民の方々が、お互いの経験を語り合いながら、新しい考え方や方法を学び合う機会としても位置づけています。また、この講座と関連させて、短期の「古文書初級講座」も開講しています。

■ 歴史文化をめぐる地域連携協議会

地域連携センターでは、県内自治体の文化財担当者、博物館等の学芸員、地域歴史遺産に関心を持たれている市民、そして大学関係者等を招き、毎年「歴史遺産をめぐる地域連携協議会」を開催しています。それぞれの活動の情報交換をはかり、地域歴史遺産の保存・活用のためのネットワーク作りを進めるきっかけになることをめざしています。

21回目となる2022年度の地域連携協議会は、「自治体史編さんの現在—参加と活用の新しい取り組み—」を全体テーマとし、地域連携センターのスタッフ、市民のみなさんから報告をいただき、全体討論を行いました。この協議会は、官学民の関係者がお互いの考え方や事業内容を知り、その後、具体的な相互協力関係を構築していく上で貴重な場にもなっており、学生・大学院生にも積極的な参加を呼びかけています。

倫理創成プロジェクト

倫理創成プロジェクトは2007年に発足し、グローバル化と科学技術時代の価値規範の諸問題に取り組むため、「リスク社会の倫理システムの構築」と「多文化共生の倫理システムの構築」という二本柱を建て、哲学、倫理学、社会学、地理学、文学、心理学等の教員と大学院生が共同し、教育・研究・文化的活動を進めています。課題の解決に人文学の観点や手法を活かし、持続可能な社会と多文化共生社会の創成をめざして、倫理創成研究会をはじめ、日中韓台の大学が連携し若手研究者が研究発表する、国際会議 Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia の開催など、学際的・国際的な活動を展開しているほか、毎年度、学術雑誌『21世紀倫理創成研究』を公開しています。

本プロジェクトが主催・共催するワークショップおよびシンポジウムでは、国内外から文理の研究分野や大学の枠を超えて、研究者や専門家、優れた市民活動を行う方々を招聘してきました。また、上記国際会議もこれまで9回開催され、その成果は、会議後、英文論文集として公開されています。内容は、応用倫理学分野にとどまらず、政治哲学や応用哲学の基礎にも及びます。大学院生が発表する国際会議を継続的に実施する研究交流は、この分野では我が国の他大学にはない特色となっています。

プロジェクトでは、研究科共通科目として博士前期課程の「倫理創成論演習」と「倫理創成論研究」、博士後期課程の「倫理創成論発展演習」を開講しています。「倫理創成論研究」では、科学技術・環境・医療倫理・研究倫理、災害対応など、社会の最前線で活躍する大学内外の講師陣が学際的研究講義を行なっています。「倫理創成論演習」および「倫理創成論発展演習」ではプロジェクトの活動成果に基づきフィールドワークも行なってきました。特に、この地区に顕著な公害・アスベスト問題について被害者や支援者の聞き取り調査を重ね、その成果をNPO、京都精華大学等と連携し、マンガを用いた書籍やブックレットとして公開するアウトリーチ活動にも力を入れてきました。

なお最近では、神戸大学が全学的に展開する「神戸大学生命・自然科学ELSI研究プロジェクト」(KOBELSI)の中心的役割を本プロジェクトが担ってい



オックスフォード夏季プログラム

オックスフォード大学 (University of Oxford) のハートフォード・カレッジ (Hertford College) での約2週間の夏季プログラムです。英国歴史・文化・社会・文学などのトピックに基づいた英語学習を行います。プログラム期間中、参加者はキャンパス内の寮に宿泊し、オックスフォード大学生のRA (Residential Advisor、寮生活アドバイザー) による学習・生活のサポートがあります。授業後や休日にはRAが企画する課外活動などに参加し、異文化交流を楽しむことができます。

ます。そこではさまざまなワークショップの開催、科学技術研究者との連携・討議により、先端科学技術に関する倫理的・法的・社会的諸問題の研究を推進しています。



『21世紀倫理創成研究』

『21世紀倫理創成研究』は、2002年度に大学院文化学研究科の改組に際して先端の学際領域として新設された「倫理創成論講座」の最新の研究動向をお伝えする刊行物『倫理創成ニュースレター』を前身とするものです。このニュースレターは第5号まで刊行されましたが、2007年度の人文学研究科への大学院改組に際して「倫理創成論講座」が「倫理創成プロジェクト」に衣替えしたことにともない、ニュースレターを発展的に継承する査読付きの学術雑誌として出発しました。2023年度末に第17号を刊行しています。研究活動の成果を公開すると同時に、現代社会の倫理や価値規範に関連ある人文学的研究の新しい領域を切り開くことを目指し、広く大学院生や若手研究者にも門戸を開き、意欲的な論考を募集しています。

他部局、他大学および海外(アメリカ、ドイツ、フランス、香港、ボスニア、チリ、イギリス、中国、台湾、韓国)の研究者・専門家の論文も掲載しています。

論文は、神戸大学学術成果リポジトリ Kernel で公開されています。



オックスフォード大学ハートフォードカレッジ

地域連携センター(2)

歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業の展開

日本列島の各地域には、地域の歴史文化に関わる膨大な資料が存在しています。これらは、地域の歴史文化と未来に向けた地域づくりの基礎資料となっています。しかしながら、近年の急激な社会変容と大規模な自然災害の続発のもとで、地域に伝来する歴史文化資料は消滅の危機に直面しています。個人宅などに伝わる資料は、所在情報や内容が把握されていない場合がほとんどであり、災害時の保全と次世代への歴史文化の継承は、日本社会において喫緊の課題となっています。

神戸大学は、阪神・淡路大震災以来の地域歴史資料保全、震災資料保存の経験を活かして、東北大学、人間文化研究機構(国立歴史民俗博物館、国立民族博物館、国文学研究資料館等6機関)と共同して、このような状況に対応するために、人間文化研究機構の基幹研究プロジェクトとして「歴史文化資料保全の大学・共同機関ネットワーク事業」を、2017年度から5ヶ年にわたって進めてきました。

本プロジェクトでは、各地の大学が持つ、地域社会において歴史文化継承を担い、大規模自然災害時には、関係組織と「史料ネット」を結成し、歴史資料保全にあたる教育研究機能を強化するとともに、その全国的なネットワークを強化し、必ず起こる大規模災害に備えていくことを目指しています。

神戸大学の主導機関として、人文学研究科は地域連携センターを拠点に西日本の中核大学として、第1に、南海トラフ巨大地震への対応等、地域歴史文化の継承に向けた実践的な教育研究を各地の大学と共同して進めています。第2には、歴史民俗博物館と連携して、被災した歴史資料保全の中で蓄積した膨大なデータを今後の災害対応や歴史文化研究に活かすための人文資料情報学の実践的研究を進めます。第3に被害を受けた歴史資料の安定的な管理と保管のための文理融合型の資料保存研究を展開します。さらに、それらの成果を地域の博物館や教育現場で活かすための大学や大学院での教育プログラムの開発に協力していきます。またハーバード大学ライシャワー研究所と連携した震災資料データベースの活用など、歴史文化資料研究について国際的な展開をはかります。



BOOKS 本の紹介



『シリーズ「地域づくりの基礎知識」1 地域歴史遺産と現代社会』 (神戸大学出版会、2017年)

本書は、人文学研究科地域連携センターでの活動や、阪神淡路大震災をきっかけに結成された歴史資料ネットワークの活動を中心に、具体的な事例を示しながら、地域の歴史や文化を地域づくりにどう活かしていくかを紹介しています。執筆者は大学の関係者に限らず、自治体関係者、在野の研究者など様々で、地域が抱える問題を多角的かつ具体的に論じています。現在、日本各地において、歴史文化をまちづくりに活かす取り組みが行われており、本書はそうした活動に対する手がかりを提供することを意図しています。



『LINK【地域・大学・文化】』

『神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報 LINK【地域・大学・文化】』は、地域連携センターの活動にかかわる研究成果の発表や、活動の報告のために、2009年度に創刊された紀要・年報です。

地域連携事業のなかから生まれた研究成果を論考や史料紹介として掲載しているほか、地域史にかかわる本の書評、あるいは地域博物館の展示評、また、各地域で歴史文化に関わる活動をされている自治体関係者や地域住民の方々に、その活動を紹介してもらうフィールド・レポートなどを掲載しています。

また、毎号特集を企画し、歴史学分野を中心としつつ、地域の歴史文化や地域連携活動に関わる様々な分野の著者にも寄稿していただき、各テーマの議論を掘り下げています。

人文学分野における大学の地域連携活動に関するもの、あるいは地域連携活動から導き出された研究成果について投稿も受け付けています。

日本語日本文化教育プログラム

日本語学、日本文学、日本史学、社会学などを専門とする大学院生が大学院修了後海外で就職し、日本語や日本社会・文化などを教える機会が増えています。特に海外からの留学生には、大学院修了後に帰国して大学等で日本語教育に携わる人が数多くいます。また、日本の中学校、高等学校の教員にも、日本語を母語としない生徒に対する日本語・日本文化の指導が求められることが増えてきました。

日本語日本文化教育プログラムは、このような状況に鑑み、様々な研究分野を専攻する大学院生が各自の専門領域を活かした上で、日本語・日本文化を教育するための基本となる知識を修得し、将来の教育実践につながる能力を身につけることを目標とした学修プログラムです。また、その専門領域は人文学のみに止まらず、様々な研究分野を想定しており、他研究科の大学院生の受講も歓迎しています。

このような目標を達成するため、本プログラムでは、「日本語日本文化教育演習」「多文化理解演習」「日本語教育研究」「日本語教育内容論」「日本語教育方法論」「日本語研究」などの科目を提供しています。必修科目である「日本語日本文化教育演習」では、日本語日本文化教育に関する講義を受講して基礎的知識を習得したのち、7月末から3週間にわたって実施される「神戸大学夏期日本語・日本文化研修プログラム」において実習を行います。この科目では、日本人学生と外国人留学生が、日本語や日本文化を外国人の視点から客観化して見る力を養い、実際に同年代の外国人との協働学習を通じて、異文化交流を体験し、日本語教育の実際を学ぶことができます。「多文化理解演習」では、日本文化・日本事情、異文化交流、ITリテラシーなどについてより詳しく学ぶことができ、「日本語教育研究」では、日本語教授法、ことに専門分野の学習・研究のために役立つ日本語教育をどのように展開して行くかについて学ぶことができます。

本プログラムを受講し、必要単位を修得した人には、人文学研究科から修了証明書を授与しています。大学院生が各自の専門分野を活かして、日本語・日本文化に関する高度な教育研究を担える人材を育成することを目標としているため、修了必要単位数は決して多くはありませんが、上記のように充実した内容のプログラムであると自負しています。

本プログラムの修了者のうち何人かは、海外の大学に留学し、数ヶ月間の日本語・日本文化教育インターンシップを経験しています。また、2015年度には新たに補助を得て、2、3か月程度の海外での日本語・日本文化教育インターンシップへの派遣が可能になりました。

なお、現在、人文学研究科の修了生で本プログラムの修了者が、華東理工大学、内蒙古大学、貴州師範学院などで日本語教育の専任講師として勤務しています。

日本語・日本文化教育プログラム修了生の声

森岡 佑奏

2023年度博士課程前期課程修了

専攻していた国語学の勉強に励む中で、外国語との比較によって日本語の特徴を見いだすことに関心を持ち、日本語日本文化教育プログラムを受講いたしました。

本プログラムでは、日本語教育が始まった歴史的側面・第二言語習得のために行われる様々な教授法の特徴などの教育分野としての知識を得ることにくわえて、多言語と比較した日本語の特徴や日本の言語景観について考え、日本語に対する感覚を養うことができます。さらに、演習では、互いに意見を交しながら、教材分析の方法、評価方法、制度情報といった日本語教師になるために必要なことがらが学べます。私は学部時代に日本語教育能力試験には合格していましたが、その際に得た知識は非常に表面的な部分にとどまっていた。本プログラムを履修したことによって、それらの表面的だった知識をより深い理解へと落とし込んでいくことができました。

また、2023年11月には日本語日本文化教育インターンシップの派遣者として北京外国語大学での研修に参加させていただき、約3週間北京に滞在いたしました。日本国内で行う日本語教育と、海外で行われる母語を利用した日本語教育という両者の相違点を考える貴重な機会となりました。また、短いながらも「異国に一人で暮らす」体験ができたこと自体が、言語とコミュニケーションの問題を考える上で非常に良い経験となりました。

最近ではコロナウイルス感染症の流行が少し落ち着きを見せ、観光地ではいろいろな国の言葉が聞こえてくるようになりました。外国人と日本語で話す場面は、日本語教師のみならず、地域や職場、日常生活の中にも、誰にでもあり得ることがらになっているでしょう。日本語日本文化教育プログラムは、日本語への客観的な理解、異文化への理解を深めるきっかけとして、多くの方に役立つプログラムだと思います。



インターンシップ期間中、万里長城にて

「日本語教育インターンシッププログラム」体験談

陳 秀茵

2019年博士課程後期課程修了

博士課程後期課程1年生のときに、「日本語教育インターンシッププログラム」に採用され、ドイツのハンブルク大学で半年間アシスタントを担当しました。普段は主に一年生と二年生の日本語の授業に参加し、学生たちが練習する時に巡回したり、授業の内容に合わせて日本の文化について紹介したりしました。その中に、漢字授業があります。「一」から漢字を勉強している彼らの姿を見たら、ヨーロッパ圏の学生にとって漢字がどんなに難しいかを実感しました。そして、今まで全く気付かなかった漢字の組み合わせや深い意味にも新しい理解ができて、とても面白かったです。さらに、先生たちの指導の下で、実際何回か日本語の授業を行いました。ドイツ語がほとんどできないので、たくさんジェスチャー、ボディ・ランゲージとイラストを使って授業を行いました。しかし、予想通りに答えてもらえなかったとか、時間配分を甘く考えてしまったとか、練習の種類が単調で盛り上がらなかったなど、たくさん思いも寄らなかった問題がありました。90分の授業の後、真冬なのに、汗だらけになってしまいました。日本語教育の研究をしているとはいえ、そのように30人以上の初級レベルのクラスに教えることは初めてで、本当に一生忘れられないほど貴重な経験でした。授業以外に、宿題のチェックや学生とのタンデムなどもして、いろいろ今までにない体験ができました。

神戸雰囲気学研究所 (KOIAS)

神戸雰囲気学研究所 (KOIAS: <http://www.lit.kobe-u.ac.jp/koiias/>) は、2022年、人文学研究科の若手教員有志を中心として設立されました。新学術領域「雰囲気学」の創出と展開を目指して、さまざまな活動を展開しています。神戸らしい風情であったり、あれこれの部屋のムードであったり、この時代の空気であったり、日々の生活を思い返すだけでも雰囲気学の重要性は明らかでしょう。それにもかかわらず雰囲気学というテーマを正面から取り上げた包括的な学術研究は従来ごくわずかにとどまってきました。数少ない先行研究も、欧米の諸言語・諸文化を前提としているものがほとんどで、理論と実践の架橋可能性も十分に検討されてはいません。こうした現状を打破するため、KOIASでは、東アジア・日本の視点をふくめた歴史文化の多様性を重視しつつ、実践知とも連携した「雰囲気学」の立ち上げに挑戦しています。2023年度には海外でふたつの国際シンポジウムを共催しました。ひとつはスロベニアで開催された「呼吸哲学」シンポジウムです。雰囲気と空気と呼吸(息/生氣)をめぐる議論を通して、身体論・メディア論・環境学など多岐にわたる重要課題が見えてきました(写真はスロベニアの研究機関との研究協定締結の様子)。もうひとつは台湾で開催された「気・氣・氣」シンポジウムです。今後も台湾の中央研究院と、東アジア内部の多様性をふまえた共同研究を行っていく予定です。また、2023年12月から翌年



KOIAS
Kobe Institute for Atmospheric Studies
神戸雰囲気学研究所

2月にかけてはローマ・トル・ウェルガータ大学のトニーノ・グリッフェッロ教授を客員教授として招聘し、綿密な共同研究を行ったほか、文学部・人文学研究科での特別授業を実施し、2度にわたる国際シンポジウムを共同で開催しました。KOIASでは、2024年度以降もさまざまな活動を展開していく予定です。関心を持ってくださった皆さん、ぜひ公開講演会などにお越しください。

文化交渉学研究プロジェクト

「文化交渉学」は、異なる文化間の関わり合いを「文化交渉」と捉え、国際的な共同研究および分野横断的研究を積み重ねて、異文化受容や理解に伴う複雑性や多様性を明らかにすることを目標とするプロジェクトです。いくつかの企画が同時進行しています。

ひとつの継続的な試みとして、パリ大学ナンテール（旧パリ第10大学ナンテール校）哲学科との継続的な研究・教育交流があります。2018年度から始まるこの交流は、ナンテール大学、大阪大学、神戸大学の三大学の共催によるもので、年に一度おこなわれる研究発表集会が主な交流の場となります。集会では若手教員、博士後期課程や前期課程に所属する三大学の大学院生や、場合によっては学部学生が、それぞれのテーマをフランス語ないしは英語で発表します。ナンテール大学からはアンヌ・ソヴァナルグ教授（フランス現代思想・芸術哲学）、ティエリー・オケ教授（生物哲学）、エリー・デューリング准教授（ベルクソン哲学・美学）、大阪大学からは人間科学研究科所属の教員、神戸大学からは芸術学の大橋完太郎教授や社会学の白鳥義彦教授らが教育担当として参加し、大学間・学問間の垣根を超えた形で日仏双方の大学院生に研究上のアドバイスを与えあう開かれた場となっています。

参加学生にとって、外国語で口頭発表をおこない、現地の研究者から直接助言を得ることや、フランスや国内他大学の若手研究者による研究成果や語学能力に直接触れ交流することは、国内の研究環境からはなかなか得ることができない機会であり、将来国際的に活躍していく上で大きな刺激となり糧となるものです。近年では、これらの成果をもとに、日本学術振興会の研究員（DC1、DC2）に採用される学生も現れています。ヨーロッパに関心をもつ若手研究者による国際的な研究発信の試みとして、こうした交流を続けていきたいと思います。

同部門での国際交流としては、北京大学・復旦大学と共同で行う大学院生の研究発表をメインとした教育研究プログラムもあります。神戸大学は、長年に渡り、北京大学および復旦大学から順番に中国語ネイティブの教員を招聘して全学の教育に当たってもらってきました。1979年から続いているこの交流人事を教育および研究に活かすため、2018年にスタートしたのが、三大学人文フォーラムです。「神戸・北京・復旦三大学人文フォーラム」と呼ばれるこのプログラムでは、北京大学を皮切りに、神戸大学・復旦大学で持ち回りで主催し、人文学の各分野を横断的に取り上げた議論が行われています。しばらくオンラインでの開催を余儀なくされていましたが、2023年には神戸大

学で久しぶりに対面での研究交流が行われました。2024年は上海・復旦大学で開催の予定です。ほかに、ヨーロッパ、アジアとの連携を深める国際共同教育・研究の機会として、ドイツのトリア大学、台湾の国立台湾大学との共同で行われる国際シンポジウムINTERFECEingも毎年開催され、多くの若手研究者が参加しています。

国内的な企画としては、学内の若手研究者・大学院生を対象にした領域横断的な学術誌の刊行も予定されており、さまざまな角度から文化間のネゴシエーションとその意義を問い、人文学の現代的な課題を解明することを目指します。



キャリアパス

人文学研究科は従来の教育システムをさらに強化して、人材を養成します。

博士課程前期課程のキャリアパス

人文学研究科はすぐれた研究者を養成する場であるのみならず、高度な専門的知識やスキルをもった職業人を養成する場でもあります。人文学という学問を通して身につけた考える力、資料文献を読みこなす力、論理的な文章を書く力などが、社会人になってからも大いに役に立つことは言うまでもありませんが、それと同時に前期課程ではさまざまな実用的技能も身につけることができます。

たとえば、大学院在学中には学会や研究会などで研究発表する機会が数多くありますが、そこで培われたプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力が就職の際にとても役立ちます。また、ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語のような、通常は大学に入ってから初めて学ぶ外国語は、学部で4年間では就職に結びつくほどのレベルにまで達することは困難ですが、前期課程でさらに2年間集中して学ぶことによって仕事に必要な語学力を十分に身につけることが可能になります。現地でより集中的に学ぶための交換留学の制度も整っていますので、ぜひ活用してください。

今日ではさまざまな職種で修士号を持っている人材が求められるようになってきました。中学校・高等学校教諭の普通免許状を取得する場合、修士の学位があると「専修免許状」が与えられ、後のキャリアアップの際にも有利に働きます。また、人文学研究科には「日本語日本文化教育プログラム」があり、それぞれの専門と連動させた高度な日本語日本文化教育を行うことのできる人材を育成しています。

修了者の就職状況

2023年度修了

兵庫県内中学校教員、兵庫県立中学校教員、和歌山県立高等学校教員、山口県立中学校教員、(株)河合塾マナビス、(株)日能研関西、神戸市役所、(株)ノジマ、スタンレー電気(株)、ビーコンコミュニケーションズ(株)、情報セキュリティ(株)、アクセントチュア(株)、三井金属商事(株)、(株)メディアハウスホールディングス、(株)出版文化社、自衛官、(株)ジェシービー、(株)オーシャンロジスティックサービス

2022年度修了

(株)エル・ティー・エス、YKK(株)、(株)良品計画、浜松市立中学校教員、東レフィルム加工(株)、エノテカ(株)、(株)DIS、(株)世界文化ホールディングス、大津市役所、豊川市役所、宇和島市役所、兵庫県庁、ビジネスエンジニアリング(株)、(株)トヨタシステムズ、(株)カプコン、(株)MTトレーディング、キンドリルジャパン(株)、大阪府立高等学校教員、三菱ケミカル(株)、徳川美術館

2021年度修了

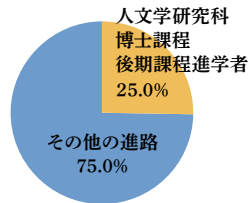
楽天グループ(株)、TOTO(株)、ネスレ日本(株)、私立姫路女学院中学校・高等学校教員、兵庫県立高等学校教員、広島県立高等学校教員、いすゞ自動車(株)、追手門学院大学附属大手前高校教員、三菱自動車、アマゾンジャパン合同会社、独立行政法人日本貿易振興機構、学校法人河合塾、(株)ワオ・コーポレーション

2020年度修了

日本郵便(株)、越谷市役所、京都府立高等学校教員、私立淳心学院中学校・高等学校、富士通(株)、国際交流サービス協会、大和ハウス工業(株)、(株)ビジネス・アソシエイツ、(株)弥栄自動車、(株)トライアード、(株)ユニアデックス、パナソニックAVCテクノロジー(株)、(株)乃村工芸社、(株)グレッズ、各校志向塾

博士課程前期課程のキャリアパス

令和5年度
人文学研究科博士課程
前期課程修了者のキャリアパス



修了者の活動状況（所属肩書きは執筆時です。）

和史（西洋史）

兵庫県立高等学校 教諭
2022年3月修了

人文学研究科博士課程前期課程の2年間、私は「14世紀イングランド」において、議会はいかなる役割を果たしていたのか」という問いへの探究を続けました。議会制民主主義に対する反発が続く現代の視点から、「14世紀という時代」、「イングランドという地域」、「中世を生きる人々」を通して見える議会の姿の解明を目指しました。

神戸大学人文学研究科では、西洋史をはじめとする人文学の高い専門性と同時に、社会学や地理学など様々な専攻分野からの視点を身につけ、根拠を持って考察することによって、自己の研究を深めることができました。さらに先生方の手厚いサポートや院生同士の交流を通して得た多角的な視点は、私にとって大きな財産となりました。

現在、兵庫県立高等学校で地理歴史科・公民科教諭として勤務しています。教科指導、校務分掌、部活動など、教育活動は多岐にわたりますが、生徒の成長を見守り支援する日々は非常に充実しています。特に、「世界史探究」や「歴史総合」などの教科指導では、大学院で過ごした2年間の経験を背景に、生徒一人一人が「他者を尊重し、問いに対して根拠を持って思考する力」を身につけることを目標としています。複雑に変化を遂げる社会の中で、学校教育を取り巻く環境は厳しさを増していますが、未来を切り拓く生徒たちの無限の可能性を最大限に引き出すべく、精励する日々を続けています。

理佳（国文学）

博士課程前期課程修了生
2019年3月修了

私は人文学研究科で中世日本の文学について学び、博士課程前期課程を修了しました。現在は、地元である神戸・大阪に根付いた一般企業に勤務しております。

大学院で過ごした2年間で私が最も実感したものは、「正解のない問い」に向き合うことの難しさ、そして楽しさであったように思います。研究を通して真剣にテキストに向き合うことで、私は物語や日記といった文学作品に綴られているものが、文字通りの意味だけを持つものではないことを学びました。そして、自らがテキストに見出した問いを解明すべく、日々様々な史料を見比べては、自分なりの答えを探し求めていました。上手くいかないことも多く、苦しい時間もありましたが、人文学研究科での専門的な学びは、私の探究心を満たし、多くの知識と経験を与えてくれました。

私は専門知識を直接的に生かせるような職業を選びませんでした。大学院での経験や培ってきた能力は、就職活動においても大いに助けとなりました。この2年間で得たものを大いに活かし、社会に貢献できるよう、今後も精進していきたいと思っています。後輩の皆様にとっても、人文学の学びが、いかなる未来をも切り拓ける力となることを願っております。

航一郎（社会学）

大和ハウス工業リブネスタウン事業推進部
2021年3月修了

私は人文学研究科博士課程前期課程で社会学を学び、郊外住宅地の自治会の研究をもってこれを修了しました。そして、現在は一般企業に就職して、この郊外住宅地の再生事業に従事しています。このように幸運にも私は研究の延長線上に職を得て、この先進的な事業に毎日ワクワクしながら充実した日々を過ごしています。

さて、私は一企業の研究色の強い部署に配属されたわけですが、同期や先輩社員の皆様は理系の方で、建築や土木を学んできた人ばかりです。この環境で人文学を学んできた私が理系の方と同じように専門知識を活かせるのかという、あまりそうとは言えません。しかしだからといって院生時代に学んだことが無駄であったとは一欠片も考えていません。というのも、人文学の学生に求められるのは幅広い教養であり、この点が理系の専門知識にも劣らない大きなアドバンテージであると感じるからです。

神戸大学人文学研究科は専修問のつながりが多いことに強みがあると考えます。実際に私も専修をまたいだ勉強会に何度か参加したりしていました。これから、企業も物ではなく人間にフォーカスしていく時代になっていくと考えます。そんな中で明快な答えをださない人文学の知の体系は、この教養という形で重要性を増してくると思いますし、専門外の人とも響き合える場所として神戸大学は最適の場であると考えます。

博士課程後期課程のキャリアパス

人文学研究科およびその前身の文化学研究科は、これまで数多くのすぐれた研究者を輩出してきました。学位を取得してすぐに常勤のポストを得ることが必ずしも容易ではない昨今の状況を踏まえて、人文学研究科では修了生を学術推進研究員や特命助教として研究科内のさまざまなプロジェクトやセンターで雇用するなど、修了生が定職に就くまでの支援を積極的に行っています。

修了者の就職状況

2023 年度修了

島根県公務員

文文学部・研究科や研究所の教員・研究員

神戸大学大学院人文学研究科教授、准教授、神戸大学大学院国際文化学研究科教授、東京大学史料編纂所教授、熊本大学文学部教授、新潟大学文学部教授、天理大学文学部教授、皇學館大学文学部教授、倉敷芸術科学大学教授、筑波大学現代文化系准教授、山口大学経済学部准教授、弘前大学人文学部准教授、茨城大学人文社会科学部准教授、島根大学法文学部准教授、上智大学文学部准教授、國學院大学文学部准教授、立命館大学文学部准教授、龍谷大学文学部准教授、都留文科大学准教授、京都文教大学総合社会学部准教授、防衛大学校人文社会科学群准教授、九州産業大学国際文化学部准教授、長崎大学大学教育イノベーションセンター准教授、追手門学院大学社会学部准教授、国際日本文化センター准教授、立命館大学映像学部講師、四天王寺大学人文社会学部講師、奈良工業高等専門学校講師、聖カタリナ大学人間健康福祉学部講師、慶応義塾大学文学部助教、中京大学国際教養学部助教、三重大学特任講師、関西国際大学現代社会学部講師

理理学部・研究科や研究所の教員・研究員

東海大学健康科学部准教授、川崎医療福祉大学医療福祉学部准教授、神戸市看護大学看護学部准教授、東京大学工学系研究科特任准教授、東京農工大学農学部講師、九州工業大学情報工学部講師、川崎医療福祉大学医療福祉学部講師、理化学研究所研究員、産業技術総合研究所研究員、防災科学技術研究所研究員、理化学研究所研究員、玉川大学脳科学研究所研究員、Max Planck 研究所研究員、株式会社 JT 研究員

海外の大学の日本語、日本文学の教員（主として留学生）

北京大学東方学系（中国）、北京外国語大学講師（中国）、広州大学講師（中国）、山西大学講師（中国）、華南農業大学講師（中国）、安徽大学講師（中国）、華東理工大学講師（中国）、内蒙古大学講師（中国）、東華大学講師（中国）銘停大学助理教授（台湾）、文藻外語大学助理教授（台湾）、漢陽大学校国際文化大学日本語言語・文化学部助教（韓国）、嶺南大学校文科大学日語日文学科副教授（韓国）、ホーチミン市経済大学講師（ベトナム）、大連外国語大学講師、南京信息工程大学文學院講師、西安外国語大学講師

文化関係の高度な学芸員、専門職員

ユネスコ北京事務所、奈良文化財研究所、京都国立博物館、台湾国立故宮博物院、北京中央美術学院、京都市歴史資料館、岩手県立美術館、越前町織田文化歴史館、孫中山記念会、神戸華僑歴史博物館、幕末と明治の博物館、大和文華館、佛教大学宗教文化ミュージアム、下関市美術館、三木市史編纂室

国際企業や海外の公務員（留学生）

日本三星、中国鞍山城市商業銀行、太平洋商事、甘肅省委弁公庁

修了者の活動状況（所属肩書きは執筆時です。）

劉 天羽

西安外国語大学日本文化経済学部 講師
2021年3月修了 神戸大学博士（文学）

私は2014年4月に研究生として日本史学教育研究分野に入り、2017年3月に前期課程、2021年3月に後期課程を修了しました。2021年5月から西安外国語大学（出身大学）に勤務しており、日本語の授業をしながら研究を続けています。日本史学では教育方針として、教員・ゼミ、専攻する時代などを超え、先生方全員で学生全員を指導する体制をとっています。私もこの環境に恵まれ、先生方に公私にわたって支えられてきました。特に博論は問題関心の段階から学際的な色が強く、先生の全幅の支持と的確なアドバイスがあってはじめて成立したことを振り返ってみれば、厳しさと自由の両立ができて研究環境だからこそ、研究のオリジナリティーが重視され、研究者の将来へとつながったものと考えています。研究のみならず、翻訳・通訳活動と日本語教育にも力を入れてきました。求めている人間像は研究のみで完結するものではないので、皆様のご支援のもと、独自で研究著書と論文の翻訳、人文系の国際シンポでの同時・逐次通訳、そして関空の税関という仕事現場での通訳などを必死に行いました。日本語教育は独学でしたが、方法論の模索と素材探し、そして人を指導することを通じて知見と経験を積んできました。いずれも日本語教育と日本史研究を両立させるための下準備であり、引き続き努力して参りたい。豊かな自然を満喫することも日課でした。海岸沿いの景色（特に明石海峡大橋辺り）が好きて、散策を楽しんできました。須磨海岸から明石市二見港までの30キロの海岸線は絶好なルートなので、いつも週二回でその中から15～20キロを適当に選んで歩き、最後には舞子公園で夕日を見ていました。博論序章のアイデアもそのおかげで得られました。好奇心と自分を成長させる意欲、それを助け合いの中で身につけること。そして研究との間の往復を。それが人文学研究科での七年間で辿り着いた、私にとっての「人文学」です。

東北大学研究推進・支援機構 知の創出センター
特任助教 / URA・プログラムコーディネータ
2020年3月修了 神戸大学博士（学術）

古賀 高雄

私は、2020年3月に博士課程後期課程（哲学コース・倫理学教育分野）を修了しました。神戸大学大学院人文学研究科学術推進研究員・非常勤講師を経て、現在は、東北大学・知の創出センターにて特任助教を務めています。いわゆる研究・教育職ではなく、学内の学際プログラム・イベントの企画運営を行う仕事をしています。哲学／倫理学と言うと、浮世離れている、とまでは言わないまでも、ひたすら古典の文献の解釈に没頭し、その世界に沈潜していくという一般的イメージがあるのかもしれませんが、もちろん古典研究や文献研究は重要です。なぜなら、その緻密な検討と研究の蓄積こそが、学問としての哲学の存立を可能にしているからです。この点を重視する点において、私が学んだ人文学研究科哲学コースは、他に引けをとりません。しかしながら、哲学や倫理学の議論が、現実の具体的問題とどう切り結ぶかを考えていくことも劣らず重要です。人文学研究科で私が叩き込まれたのは、まさにそうした態度でした。私が現在勤めている東北大学知の創出センターのオフィスは、材料科学高等研究所というところにあります。隣の部屋には、何やらすごそうな実験機器がたくさん並んでいます。同僚たちも、私以外、理系で博士号をとった人々です。話の中に化学式やら数式やらが出てくると正直お手上げですが、それでも何とか仕事ができているのは、神戸で学んだそうした態度のおかげだと思っています。

陳 秀茵

東洋大学 講師
2019年3月修了 神戸大学博士（学術）

2016年に博士前期課程を修了し、2019年に博士後期課程を修了しました。現在、東洋大学にて日本語講師として勤めています。専門は現代日本語・日本語教育です。博士後期課程では、自力で課題を切り開いて、研究の全体像を作り上げ、さらに深く追究していく力がより求められます。一回一回の学会発表に努め、一本一本の投稿論文を仕上げることによって、他人に自分の考えを伝えるスキル、参考文献を網羅する情報検索力・要約力や多様な角度から分析・考察する研究能力など、様々な力が身につきます。どのような仕事に就いても、必ず役立つと思います。神戸大学人文学研究科では、日本国内における研究最前線の理論だけでなく、国際的な現状と課題を学ぶこともできます。例えば、D1の後期に、半年間、ドイツのハンブルク大学へ日本語教育インターンシップに行かせて頂きました。非漢字圏学習者への漢字指導方法やアクティブラーニングの仕方など、たくさん学ばせて頂きました。現在、東洋大学の国際教育センターでもヨーロッパの学生がたくさん学んでいるので、毎日の授業で、ハンブルク大学での経験が大変役に立っています。また、大学院は厳しくて毎日忙しいとイメージしている人もいかもしれませんが、私はたくさん思い出がある5年間を過ごしました。春は1階の共用ルームで新緑を見ながらお弁当を食べて、夏は図書館前の葉っぱのつるの下でコーヒーを飲みながら休憩して、秋は真っ赤に染まった紅葉を見ながら海を眺めて、冬は研究室の先輩・後輩と一緒に鍋を食べに行ったりしていました。研究上、いろいろな悩みがありましたが、素晴らしい自然環境と、暖かい研究室環境に恵まれたおかげで、楽しい研究生生活を送ることができました。現在でも、神戸大学人文学研究科で学んだこと、身につけたものを活かしながら、充実した、楽しい日々を過ごしています。

学会・研究会と刊行物（2）

学会・研究会と刊行物の紹介ページはこちら



『DA』

神戸大学ドイツ文学会

平成3年に当時の大学院生たちが中心となって創刊したドイツ文学論集です。一時期休刊していましたが、平成22年以来、ふたたび活気をとりもどし、神戸大学のドイツ文学関係者（人文学研究科と国際文化学研究科の教員および大学院生と修了生）が主な会員となって、1～2年に1冊のペースで刊行しています。近年は特に人文学研究科で学ぶ若手研究者たち、大学院生たちの研究成果を論文としてまとめて公表しています。



『神戸大学史学年報』

神戸大学史学研究会

『神戸大学史学年報』は、日本史・東洋史・西洋史共同の歴史関係の雑誌です。1980年に文化学研究科が設置されてから、大学院生たちが音頭をとって、86年に雑誌創刊を実現させました。それ以来、神戸大学に学ぶ若手の歴史研究者を中心にしながら、院生が立案するシンポジウムには学外からも研究者を招聘するなど、学内外の研究交流の場として活用されています。



『社会学雑誌』

神戸大学社会学研究会

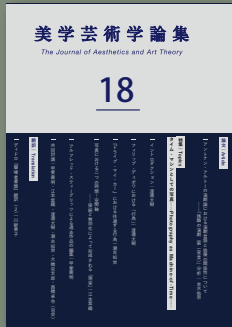
本誌は、かつて存在した『ソシエテ』誌を発展的に継承して1984年に創刊されました。「神戸大学社会学研究会」という学会組織を母体として、毎年発行されています。投稿論文の掲載はもとより、毎号で特集を企画して学術的社会的な要請に応えていること、海外における社会学の動向に注目していることなどが特徴です。編集にあたっては、学術研究と社会の結びつきを重視する立場を取っています。このように、本誌は社会学分野においてユニークな存在であり、同時に内容的にも充実しています。このため、学会等で高く評価されています。



『神戸言語学論叢 (Kobe Papers in Linguistics)』

神戸大学文学部言語学研究室

1996年4月に学部の言語学専攻課程が設立された（英米文学専攻から独立した）のを機に、言語学研究室関係者（教員及び修了院生）の最新の研究成果を報告する趣旨で創刊されました。1998年に創刊号が刊行され、2022年に第13号が刊行されています。他のルートによる正式な出版が決まっている論文のより迅速な回覧と、まだ改稿の余地のあるワーキング・ペーパーによる研究成果の公表を目標としています。



『美学芸術学論集』

神戸大学文学部芸術学研究室

本論集は、従来刊行していた『芸術学芸術史論集』に代わって、新体制となった芸術学研究室の構成員（教員及び院生）の研究成果を発信することを目的に、平成17年に創刊されました。今日、メディアの進歩や情報化の拡大とともに、芸術そのものも大きく変化し続けています。こうした芸術文化の変化と不変なものを見すえつつ新しい「美学」「芸術学」を創建する場として、学外の研究者の協力もえながら、充実した論集をめざしています。



『美術史論集』

神戸大学美術史研究会

小林太郎に始まり、山根有三、毛利久、池上忠治らに至る五十年におよぶ美術史学研究室の歴史は、学問の深化と人材の広がりをもたらしました。各地の同窓先学諸氏の今日に至る足跡をたどる時、そこに自ずから神戸大学美術史学の独自性と確乎たる個性が見えてきます。『美術史論集』は神戸大学美術史研究会の研究誌であり、美術史研究室の教員、院生、学生が中心となって編集していますが、今まさに活躍中の先輩諸氏をはじめ、学外の先達にも参加を賜り、美術史学研究をリードする先端的な交流の場となっています。本誌は学問、学風を越えた新風を喚起することを目指しています。

人文学研究科の現状（1）

大学等との交流協定

国内の大学等との交流協定締結状況

学部等名	大学学部等名	協定締結日	学部等名	大学学部等名	協定締結日
人文学研究科	奈良女子大学大学院 人間文化総合科学研究科	令和2年4月1日	人文学研究科	神戸松蔭女子学院大学 大学院文学研究科	平成19年4月1日
文学部	大阪大学文学部	平成19年4月1日	人文学研究科	神戸市外国語大学 大学院外国語学研究科	平成19年4月1日
人文学研究科	大阪大学大学院人文学研究科				

外国の大学等との交流協定締結状況

国名	大学学部等名	協定締結日
大韓民国	韓国外国語大学校日本語大学	平成29年 1月13日
中華人民共和国	鄭州大学美術系	平成18年 5月18日
	香港大学文学院	平成20年 3月31日
	東北大学外国語学院	平成29年 3月 9日
ドイツ	ハンブルク大学人文学部 アジア・アフリカ研究所	平成20年 3月10日
ポーランド	ヤゲウォ大学哲学部	平成10年 11月 9日
ルーマニア	「ディミトリエ・カンテミル」 キリスト教大学外国語学部	平成30年 3月20日
オーストリア	インスブルック大学社会・ 政治学部	平成30年 11月30日
クロアチア	ブーラ大学人文学部	令和元年 6月14日
セルビア	ベオグラード大学	令和2年 8月19日

入学者に関するデータ

令和6年度人文学研究科博士課程前期課程入学者（41名）中の神戸大学文学部出身者

神戸大学文学部出身者	32%（13名）
他大学等出身者	68%（28名）

令和5年度人文学研究科博士課程前期課程修了者（51名）中の人文学研究科博士課程後期課程進学者

人文学研究科博士課程後期課程進学者	25%（13名）
他大学研究科進学者	2%（1名）
その他の進路	73%（37名）

人文学研究科博士課程後期課程入学者状況（出身大学院別）

入学年度	神戸大学大学院人文学研究科	その他の大学院	計
令和6年度	14（7）	3（1）	17（8）
令和5年度	10（6）	6（4）	16（10）
令和4年度	11（4）	5（2）	16（6）
令和3年度	11（4）	6（5）	17（9）
令和2年度	12（5）	3（1）	15（6）

注（ ）内は外国人留学生で内数

日本学生支援機構奨学金受給状況

年 度	出願者数	採用者数	採用率
令和5年度	11	11	100.0%
令和4年度	10	10	100.0%
令和3年度	6	6	100.0%
令和2年度	6	6	100.0%
平成31年度	8	8	100.0%

大学間協定により人文学研究科と学術交流を実施している大学

国 名	大学学部等名	協定締結日	
大韓民国	木浦大学校	平成14年	5月20日
	成均館大学校	平成14年	10月15日
	韓国海洋大学校	平成15年	10月 6日
	ソウル国立大学校	平成21年	4月28日
	高麗大学校	平成24年	5月15日
中華人民共和国	山東大学	平成12年	5月 8日
	華東師範大学思勉人文高等研究院	平成23年	12月15日
	中山大学	平成12年	7月17日
	南京大学	平成29年	2月17日
	中国海洋大学	平成18年	9月 6日
	復旦大学	平成20年	3月12日
	北京外国語大学	平成20年	11月 3日
	武漢大学	平成20年	11月26日
	上海交通大学	平成21年	4月 9日
	清華大学	平成21年	4月28日
	鄭州大学	平成18年	5月18日
	東北大学	平成29年	3月 9日
	香港大学	平成31年	5月17日
台 湾	国立台湾大学	平成14年	2月27日
	国立政治大学	平成29年	7月21日
	国立成功大学	平成31年	2月15日
モンゴル	モンゴル国立大学	平成29年	4月 1日
オーストラリア	西オーストラリア大学	平成18年	10月20日
	ウーロンゴン大学	平成29年	7月24日
	ニューサウスウェールズ大学	平成30年	6月29日
アメリカ	ジョージア工科大学	平成29年	10月30日
カナダ	オタワ大学	平成27年	1月13日
オーストリア	グラーツ大学	平成18年	8月22日
	インスブルック大学	平成30年	11月30日
チェコ共和国	カレル大学	平成18年	11月 2日
フランス	パリ第2大学	平成17年	7月14日
	パリ第10大学	平成18年	4月 6日
	リヨン高等師範学校	平成21年	1月21日
	リール大学	平成30年	7月24日
	エクス＝マルセイユ大学	令和元年	6月16日
	パリ・シテ大学	令和4年	3月 2日
スペイン	バルセロナ大学	平成28年	9月30日
	ボンベウ・ファブラ大学	令和2年	2月21日
スイス	バーゼル大学	平成29年	9月 7日
イギリス	バーミンガム大学	平成11年	10月28日
	SOAS ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	平成19年	3月17日
	エセックス大学	平成29年	2月 4日
オランダ	ライデン大学	平成21年	4月28日
ブルガリア	ソフィア大学	平成24年	7月25日
ベルギー	ブリュッセル自由大学	平成28年	10月12日
イタリア	ヴェネツィア大学	平成23年	5月10日
	ボローニャ大学	平成28年	3月18日
	トリノ大学	平成28年	12月20日
ポーランド	ヤゲウォ大学	平成25年	10月10日
	ニコラウス・コペルニクス大学	平成29年	5月31日
	ワルシャワ大学	令和2年	7月30日
ドイツ	キール大学	平成28年	5月12日
	マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク	平成28年	7月16日
	トリアー大学	平成27年	6月 2日
	ダルムシュタット工科大学	平成30年	8月 7日
	ベルリン自由大学	令和元年	8月29日
	ミュンヘン工科大学	令和5年	6月19日
	ダルムシュタット工科大学	平成30年	8月 7日
ハンブルク大学	平成25年	3月21日	
ルーマニア	ブカレスト大学	平成28年	12月15日
	「ディミトリエ・カンテミル」キリスト教大学	平成30年	3月20日
ロシア	サンクトペテルブルグ大学	平成28年	11月25日
ハンガリー	エトヴェシュ・ロラード大学	平成30年	4月12日
	ブタペスト・コルヴィヌス大学	令和元年	12月 2日
イスラエル	ヘブライ大学	令和5年	12月 5日
スロバキア	コメニウス大学	令和2年	3月 3日
セルビア	ベオグラード大学	令和2年	8月19日

人文学研究科博士課程前期課程修了者論文題目（過去2年間）

2024年3月 修了者

- 哲学
アリストテレス『ニコマコス倫理学』における幸福と徳の関係について
- 倫理学
過ぎ去りし<他なるもの>への「方向付け（orientation）」― 60年代レヴィナスにおける形而上学の現象学的方法―
ゲノム編集の人体応用における女性の状況についての考察―ケアの倫理の視点から―
遺伝子編集における自律性について
- 国文学
『吾妻鏡』における武士表象―鎌倉幕府草創期を中心に―
石川淳研究―その思想と想像力の軌跡―
北原白秋論―近代の詩と国語―
金史良作品論―初期作品における民衆表象を中心に―
坂口安吾の作品群におけるカタカナ表記使用の変遷とその効果
『平家物語』における文覚説話について―延慶本を中心に―
- 中国・韓国文学
厳歌苓作品におけるクィア叙事―『白蛇』を中心に―
「安楽郷」から「美楽地」へ―郭強生『断代』の新しさと存続性
1920年代中国における市民階級の女性イメージ―張恨水の初期代表作を中心に―
唐詩における楊貴妃像の推移と発展―李白、杜甫、白居易、張翥を中心に
- 英米文学
The Death in Romeo and Juliet
- Comparative Analysis between Shakespeare and Arthur Brooke -
Reconsidering Domesticity in the Two Domestic Novels of Asian American Women Writers: Margaret Dilloway's *How to Be an American Housewife* and Ruth Ozeki's *My Year of Meats*

2023年3月 修了者

- 哲学
家族的類似概念における概念の境界に関する探究
- 倫理学
言葉を贈る ―レヴィナス『全体性と無限』における「贈与」概念の言語論的考察
異文化間エコフェミニズムにおける弱者の連携に関する考察―完全な客体の結びつきから男性弱者との連携へ―
- 国文学
『平家物語』における安德天皇関連説話の研究―九二〇年代モダニズムと新感覚派文学の方法：『文芸時代』を中心に
日本語教育の視点に立った中学校国語教科教科書の文構造の分析
山本有三研究：通俗小説の構成
- 英米文学
A Study of Ernest Hemingway's War Literature
Narrative Analysis of Shakespeare's Characters in Othello: A Comparative Study in English and Farsi
- ヨーロッパ文学
ゲーテ『親和力』における世界の「図像」化―静止による内的イメージの生成―
ティークにおける読書と<越境>―『金髪のエックベルト』を中心に―
ミシェル・ウエルベック研究
ターハル・ベン＝ジェルーン研究―「性のあり方」と「真正なモロッコへの帰帰」―
- ヨーロッパ文学
ジュリアン・グラク研究
ゾラ『ジェルミナル』研究―カトリヌの死をめぐる―
ミシェル・トゥルニエ研究
- 日本史学
中世後期鶴荘における荘園制と在地社会―名体制の再編と検断権を中心に―
日本古代における人名の機能と使用実態に関する基礎的研究
明治初期における「学事」の創出過程―第二次兵庫県と神田孝平を事例に―
中世丹波国波々伯部保に関する一考察―構造・伝領・神領興行―
戦国大名今川氏の三河支配における支城領の特質
昭和前期の情報宣伝政策と「特攻」報道
- 東洋史学
1900年代初頭大韓帝国におけるイギリスの動向―遂安金鉉特許獲得交渉及び第二回日英同盟協約を中心に―
- 西洋史学
ヴィシー政権期パリのユダヤ人迫害と住宅問題―サン・ジェルヴェ地区を例に
古典期の戦場におけるギリシア人の演説と兵士の士気との関係性について―『アナバシス』とその他の記述から―
19世紀フランス社会における「自称貴族」と承譜学者
14世紀黒海におけるヴェネツィアの活動―キプチャク・ハン国君主との関係に注目して―
- 心理学
The influence of parasocial relationships on purchase intention: Based on self-related brand perception
終わりを認識することが感情と行動に及ぼす影響

- 言語学
日韓両言語における文末ヘッジ表現の比較―思考述語と様態表現を中心に―
チェコ語を母語とする日本語学習者による修飾句のプロソディー
- 芸術学
デカルトにおける「想像力」概念的美学的射程
ジャスパー・モリソンの「スーパー・ノーマル」についての考察
- 社会学
中国人学生の日本留学―ライフスタイル移住の観点からの考察―
中国メディア空間における「農村」イメージの生成と変遷―「土味文化」に注目して―
在ロシア人夫婦が参加する親コミュニティの特性と機能―ロシア語教室を中心に―
在ロシア人の若者はどう生きるのか―高学歴若者のライフクラフティングプロセスを考察して―
2000年代以降におけるライフスタイル移民としての「新・新華僑」―移動・生活・次世代教育を中心とした聞き取り調査から―
教師への信頼と専門性／専門職性―教師と保護者の関わりに焦点を当てて
1980年代以降の日本における「Working Woman」のイメージの変遷―実用情報誌『日経WOMAN』から―
中国における女権主義者たちの家族と生活
- 美術史学
19世紀初頭のフランスにおける「Intérieur」と「Troubadour」の流行―アングル《システーナ礼拝堂のピウス7世》を中心に―
20世紀中国の労働者版画について―陳煙橋の作品を中心に―

- 日本におけるニューカマー中国人の生活領域の展開―新たな活動空間を作り出す可能性への問いから―
在日中国人私費留学生と家族の教育戦略：高等教育意識に関する世代間の異同
日中国際結婚した中国人女性の就労意識とワークライフバランス―若年層へのインタビュー調査に基づく考察―
「母であること」を再考する―選択的シングルマザー・シングルマザー・マリッドマザーの語り―
婚姻支払から見る中国女性の結婚観―現代の東北地方を中心に―
中国インターネット空間におけるアンチ・ファンに関する実証的研究―「飯圈」文化の反対者の「飯圈」化―
- 美術史学
又兵衛風源氏絵についての一考察 細見美術館蔵「源氏物語総角図屏風」を中心に
ロレンツォ・ロット作ブラド美術館所蔵《聖ヒエロニムス》について
ロヒール・ファン・デル・ウェイデン《ボースの祭壇画》について
- 地理学
再開発による地域変容とソーシャルミックスの可能性―川崎市武蔵小杉地区を事例に―

人文学研究科の現状（2）

博士号取得者（令和元年度～令和5年度）

■ 課程博士

氏 名	論 文 題 目	学位授与年度
李 倩 *	アリストテレスの政治哲学における個人とポリス共同体の関係について	令和5年度
竹 永 知 弘	古井由吉論—その文学的展開と方法論的試行錯誤の記述	令和5年度
金 亜 奇 *	北朝離宮和歌の研究—洛西の歌壇と京極派の表象空間—	令和5年度
石 橋 知 之	近世大坂の出版統制と書物・出版環境	令和5年度
田 中 昇 一	日本古代地域支配機構の研究	令和5年度
跡 部 史 浩	近代日本における初期社会主義運動の研究—中央と地方の関係から—	令和5年度
金 正 琳 *	チャハルモンゴル語の音声学・音韻論的研究	令和5年度
BAGHBANMOSHIRI * HOMEIRA	Analyzing the “Cultural Identity” of Videogames — Through the Comparison Between Final Fantasy and The Witcher Game Series (ビデオゲームにおける「文化的アイデンティティ」の分析—ファイナルファンタジーゲームシリーズとウィッチャーゲームシリーズの比較を通じて)	令和5年度
張 凌 霄 *	人新世における人間と非人間との関係に関する考察 —ティモシー・モートンと石牟礼道子を手がかりとして—	令和4年度
上 嶋 悟 史	近世仏画研究	令和4年度
章 博 文 *	マーサ・C.ヌスバウムにおける感情と教育に関する考察—子供を手がかりとして	令和4年度
大 家 慎 也	人格的自律と技術の影響力—ドゥオーキンの自律論とフェルベークの技術倫理学をてがかりに	令和4年度
芹 澤 久 恵	『今昔物語集』巻二十六の宿報観について	令和4年度
松 本 瑞 貴	『源氏物語』における、明石物語の展望をめぐって	令和4年度
何 芸 凡 *	明治期の漢語理解—漢語辞書をめぐって—	令和4年度
鄭 洲 *	わたしを拗らせるもの—蘆隠、琦君、三毛の苦悩表現	令和4年度
梅 田 杏 奈	上層中産階級の女性作家としてのヴァージニア・ウルフ—二項対立の概念への挑戦とその限界	令和4年度
大 杉 奈 穂	ヘルマン・ヘッセにおける〈東方〉	令和4年度
山 下 泰 生	18世紀ウィーン宮廷における外政運営と儀礼論争—侍従長ケーフェンヒューアー伯爵の『日誌』の分析から—	令和4年度
米 谷 充 史	Critical Examination of Life History Theory in Psychology（心理学における生活史理論の批判的検討）	令和4年度
李 兆 欣 *	「モンゴル風イメージ」の構造—中国内モンゴル自治区都市部を中心に—	令和4年度
徳 宮 俊 貴	見田宗介における社会構想の社会学—人間の可能性の理論	令和4年度
中 川 祐 希	近現代日本における公共空間の政治に関する地理学的研究—京都駅前広場と湊川公園を事例として—	令和4年度
出水 清之助	自由民権期における「地方団結」と政党運動	令和3年度
小 谷 真 千 代	仲介業を通じた都市労働市場再編に関する地理学的研究 —1970年代以降の地方都市におけるブラジル人労働者の移動と定着の過程を中心に—	令和3年度
RODIS FOTIOS *	The social imaginary arche in ontological philosophy by Cornelius Castoriadis: Dimensions of imagination in social institutions and scientific praxis	令和3年度
王 小 梅 *	吉本隆明と戦後市民民主主義—大衆と市民の交錯	令和3年度
松 田 樹	中上健次作品研究 —「政治と文学」の終わりから「近代文学の終わり」まで—	令和3年度
森 田 知 之	『西宮左大臣集』の研究	令和3年度
古 川 拓 磨	Christianity and Interethnic Relations in the Literary Works of the Two Nisei Women Writers—Hisaye Yamamoto and Joy Kogawa	令和3年度
龍 蕾 *	梁啓超の啓蒙思想における多文化構造	令和3年度
上 田 真 奈	Robustness of the Source Effect of Disgust(嫌悪源効果の頑健性)	令和3年度
森 山 倭 成	節の右方周縁部における線形順序と階層構造	令和3年度
居 村 匠	食人者の法—オズヴァウヂ・ヂ・アンドラーゼの食人の思想における人間像—	令和3年度
BROOK THOMAS *	「越境作家」に関する言語横断的研究—リービ英雄を中心に—	令和3年度
大 川 内 晋	コスモポリタニズムと現代社会:U・ベックの社会理論からの展開	令和3年度
亀 田 晃 輔	クロード・モネの評価確立の過程—美術批評を通した分析を中心に(1880-1900年)	令和3年度
陳 詩 雨 *	“民主主義”をめぐる吉本隆明と柄谷行人—ラディカルデモクラシーの視点からの考察	令和2年度
馮 雁 鴻 *	タロウとノデハナイカに関する一考察—中国語話者への教育に向けて	令和2年度
井 上 高 輔	古典語における時に関わる文法形式の意味・機能—体系変遷記述に向けたキ・ケリ・ツ・ヌのモデル化—	令和2年度
朱 一 平 *	中国人日本語学習者のビリーフ研究	令和2年度
劉 夢 如 *	寺山修司研究—アングラ文化における言語表現—	令和2年度
徐 翌 *	小松左京研究—SF文学と日本像の再構築—	令和2年度
尾 田 知 子	Counter-Cultural Representations of “the Orient” in J. D. Salinger’s Literary Works(J. D. サリンジャーの文学作品におけるカウンター・カルチャー的「東洋」表象)	令和2年度
簡 井 瑞 貴	Rereading Dickens’s Fiction: Narrative Form and Self-Reflexivity(ディケンズ文学の再読: 語りの形式と自己言及性)	令和2年度
長 町 顕	内務省河川政策における西村捨三の「旧慣」認識の特質—明治18年淀川大水害以降を中心に—	令和2年度
津 熊 友 輔	府県の「地方権力」化と三新法体制	令和2年度
劉 天 羽 *	戦間期日本の「国防」概念—その特徴と機能の変遷を中心に—	令和2年度
山 上 憲 太 郎	八世紀における写経体制の研究	令和2年度
王 輝 鎔 *	二十世紀前半欧米のミュージアムにおける日中古美術の収蔵と展示	令和2年度
丸 山 栄 治	まったく何もないという可能性とその語法	令和2年度
田 口 玄 一 郎	木村素衛の教育思想研究—京都学派の戦後思想の一射程—	令和2年度
劉 靈 均 *	台湾「同志文学」における日本	令和2年度
DO KIEN TRUNG *	Richard Rorty’s Critique of the “Self”: For Re-description and Solidarity	令和元年度
劉 争 *	「雑種文化」と「土着世界観」をめぐる問い—戦後知識人・加藤周一の射程—	令和元年度
小 嶋 恭 道	ミシェル・フーコーの真理と虚構の概念について	令和元年度
古 賀 高 雄	「想像力」概念の技術論的展開—技術・イマジナリー・想像力—	令和元年度
茶 谷 翔	国策研究会論—「国策」と「挙国一致」の言説をめぐって—	令和元年度
笠 松 敬 太	近現代日本の青年教育と徴兵制—総力戦体制の構築と限界性—	令和元年度
野 村 雄 紀	17世紀前半ヴェネツィア共和国の本土領統治—1619-1621年の本土領監査審問官の巡察を中心に—	令和元年度
張 偉 霞 *	日本における中国人ニューカマーとその子どもたち	令和元年度
津 田 翔 太 郎	アイデンティティ理論の再構築	令和元年度
若 狭 優	電子メディア上の相互行為における「現実」の組織化の諸相—Twitter における「フレームの重層化」に着目して	令和元年度
鰐 松 林 *	歌川国芳研究:水滸伝を中心に	令和元年度
中 嶋 浩 貴	A Cognitive Linguistic Study of Noun-to-Verb Conversion in English: An Integrated Approach of Frame Semantics and Conceptual Metonymy Theory	令和元年度

■ 論文博士

氏 名	論 文 題 目	学位授与年度
前 田 徹	中世後期播磨の国人と赤松氏	令和4年度
平 田 文 子	デュルケーム世俗道徳論の中のユダヤ教:ユダヤの伝統とライシテの狭間で	令和4年度
高 久 智 広	幕末維新期の畿内における海防・開港政策と地域社会—大坂町奉行と地域社会の関係にみる—	令和元年度

* 外国人特別学生

人文学研究科の沿革

1953年4月	文理学部文科に専攻生制度開設
1958年4月	文学専攻科設置 3専攻:「哲学」「史学」「文学」
1968年4月	大学院文学研究科(修士課程)設置 6専攻:「哲学」「芸術学芸術史」「社会学」「史学」「国文学」「英米文学」
1971年12月	研究生制度開設(文学部)
1975年4月	外国人特別学生制度開設
1979年4月	大学院文学研究科文化構造専攻(独立専攻:後期3年博士課程)設置 1専攻:「文化構造」 2講座:「文化原理論」「比較文化論」
1980年4月	上記文化構造専攻と社会文化専攻からなる大学院文化学研究科(独立研究科:後期3年博士課程)設置 2専攻:「文化構造」「社会文化」 5講座:「文化原理論」「比較文化論」「社会文化原理論」「地域社会文化論」「比較社会文化史」
2002年4月	大学院文化学研究科改組 2専攻:「文化構造」「社会文化」 7講座:「倫理創成論」「文化原理論」「比較文化論」「知識システム論」「社会文化論」「比較社会文化史」「文化資源論(連携講座)」
2005年4月	大学院文学研究科改組 2専攻:「文化基礎」「文化動態」 5講座:「哲学」「文学」「史学」「知識システム」「社会文化」
2007年4月	大学院人文学研究科設置 2専攻:「文化構造」「社会動態」 5コース:「哲学」「文学」「史学」「知識システム論」「社会文化論」
2010年9月	大学院文学研究科廃止
2015年3月	大学院文化学研究科廃止



在学生の声

Students' voice

阿部 万里亜 (英米文学)



前期
課程

私は学部から神戸大学に在籍しています。大学院に進学した理由は、学部での学びを通して文学を考える面白さに気がついたからです。視点を決めて作品を考察することで、筋書き以上の物事が見えてきます。今まで不可解に思っていたことが分かるようになり、見逃していたものに注意が向くようになります。私が研究しているハロルド・ピンターの作品との出会いはそのような体験の典型でした。初めて彼の作品を読んだのは一年の春休みの集中講義。正直、「よく分からない。」と思った。しかし、登場人物たちの言葉の使い方に着目するという視点を学んだことで、解釈できる範囲が増え、一気に作品が面白くなりました。

考えたことを言葉にして伝える面白さも知りました。私はもともと自分の意見を述べることに抵抗があり、文章を書くことや発表をすることが嫌いでした。そのため、初めは2000字のレポートを書くことでさえ苦痛でした。しかし、作品や文献に向き合い、思考を形作っていく作業は苦しみだけでなく、充実感も与えてくれました。また、考えを言語化することで他者と交流できることに気がつきました。特に対面授業では自分が発表したことに対する反応を直に得ることができます。回数を重ねるごとに手ごたえを感じることが増え、自信に繋がりました。

田中 寛大 (西洋史学)



前期
課程

私は学部時代から神戸大学に在籍していました。大学院への進学を決めた理由は学部生の頃の研究をより専門的に行いたいと考えたからです。西洋史学専修に入ってからずっとアメリカ近現代政治史を勉強していたのですが、関心のあるテーマが常に複数存在していたため卒業論文の研究テーマを決定するのに時間がかかってしまいました。そのため4年の後期が始まった頃により早く研究テーマが決まり急ピッチで卒業論文の執筆をせざるを得ませんでした。このままでは自らの研究に悔いが残ってしまうと感じたため、大学院で一つのテーマに集中して打ち込む時間と経験が欲しいと考え進学を決意しました。現在は冷戦終結直後のアメリカでの対外介入を巡る言説を研究テーマとしています。

西洋史学専修では、院生と先生方が全員参加する大学院ゼミと各時代ごとに分かれて外国語文献を購読する演習が授業の中心となっています。まず大学院ゼミでは前期後期に1人1回ずつ院生が自身の研究をレジュメにまとめて発表し、その後質疑応答の時間に移り発表内容についての議論を深めます。特

ブラザートン・ ポール・アンソニー (日本史学)



前期
課程

私はイギリス出身で、約6年前に来日しました。日本に来る前に、特にやりたいと思っていたことがなく、不真面目な学生でした。来日するにもはっきりとしたきっかけはなく、日本の大学に入る以外に確定した目標もありませんでした。

日本語学校を卒業し、大学に入学し、興味のあった日本史を専攻することになりました。しかし、日本史の勉強を一切したことがなかったのも、授業で付いていくのにとても苦労していました。一生懸命勉強を続けていくうちに、視野がどんどん広がったり、また、日本古代史に対して非常に熱心になり、生業として日本古代史を研究したいと思うまでになりました。そして、今は外部生として神戸大学院に進学をし、大化前代というかなり古い時代を中心に古代丹波の地域を研究対象としています。

大学院の授業に関して、毎週院ゼミで『日本書紀』の中で担当している部分について綿密に調べ、関わっている研究史もまとめた上で、それについて報告し、他の院生と先生から指摘をいただきながら議論を行います。他にも、学部生も参加する学部ゼミで『類聚三代格』について同じような報告が

フィードバックや他の人の発表から自分の視野の狭さや表現の稚拙さに気付かされることもありましたが、それも含めた交流が刺激的で楽しかったです。

文学を考える面白さに気がつくのと、学部だけで学びを終えることに物足りなさを感じるようになりました。作品について考えられる範囲が広がると、同時に新たに気になることや不可解なことも見えてきます。今の自分の知識や発想の乏しさを痛感しました。考えをやりとりする楽しさを知ると、コロナ禍の影響もあり、学部時代に交流の機会が少なかったことが残念に思われました。このような思いを抱いた時期はちょうど、卒業後の進路に迷っていた時期でした。大学院に進学して、やれるだけのことをやってみようと思いました。

大学院生活はまだ始まったばかりですが、今のところ楽しんでます。大学院の授業では理論や批評について学ぶ授業があります。学部時代は作品の精読が授業の中心だったため、新鮮です。関心や思考の幅を広げるきっかけにしていきたいです。また、大学院には留学生や他の大学から進学した学生も多く、自分とは異なるバックグラウンドを持つ新たな仲間との出会いが刺激になっています。

に先生方からのフィードバックは改善点を的確に指摘しており、これから研究を進める上での方針策定において大いに役立ちます。また演習に関して、英語、フランス語、イタリア語、古代ギリシア語の文献購読の授業が開講されており、西洋史研究には必須とも言える外国語読解の能力を身につけることができます。

私は大学院生になってからまだ数ヶ月しか経過していませんが、レベルの高い周りからの刺激を日々受けながら研究を進められています。もちろん研究だけに集中するとはいかず就活や公務員試験の対策、アルバイトに追われる日々を過ごしていますが、個人的には充実した学生生活を送れていると思います。定期的に先生方に研究の進捗を報告して研究を進める上でのアドバイスをいただいています。さらに今では学部生時代ではあまり手につけられなかった研究対象よりもっと古い時代のアメリカ外交史の文献を読み込んで近現代史研究の土台を固める時間も取れています。自身の関心・視野を広げ質の高い研究をすることを目標として、悔いが残らないような充実した2年間の大学院生活を送りたいと思います。

あり、同じ時代を研究している学生だけで行う古代史研究会なども実施されています。

今までは自分の研究のみに集中し、他の研究に目を向ける機会がほぼありませんでした。しかし、今は様々な報告や研究に関する議論に参加していることで、視野がさらに広がり、日本古代史に関する知識が深まっています。授業外でも、先輩から研究に関する様々なアドバイスをいただいたり、同じ古代史を研究している同級生とお互いの研究について話し合うなど、非常に良い研究環境となっています。

院生としてやることが非常に多く、とても難しいと感じていますが、とても真面目で志の高い同級生、優しい先輩や先生方に恵まれ、毎日成長できていてと実感しています。これから、さらに勉強する内容のレベルは上がっていくと思いますが、努力を重ね、いつか素晴らしい研究者になりたいと考えています。

米谷 実紗 (国文学)



前期
課程

私は学部生の頃から神戸大学に所属しています。日本文学、特に江戸後期の長編小説について研究しており、曲亭馬琴作品における怪異描写に関心があります。

大学に入学し、日々の講義・演習で様々なテキストに触れ、議論を重ねる中で、「古典とされる作品たちを如何に受容し、どのように活かしてゆくのか」という点に強い関心を持つようになりました。江戸時代の日本で書かれた作品の中には、それ以前の作品を利用して新しい表現を生み出しているものが多くあります。もう少し時間をかけて江戸読本について研究し、自分のもつ問いに向き合いたいと思い、大学院に進学しました。

大学院では、学部生のときよりも少人数で手厚い指導を受けることができます。また、学外の研究会への参加など、同じ関心を持った学外の大学院生や先生方と交流する機会もあります。学部生の頃のように、学内の他のゼミの授業に参加することも可能です。もちろん、研究室や図書館の机の上で、文献と向き合う時間もあります。

田村 豪 (社会学)



後期
課程

初めに人文学研究科の「大学院生の日常」を（あくまで社会学に限って）紹介します。もちろん院生は修士論文や博士論文の執筆に向け、文献を読んだりフィールド調査を実施したりして自身の研究を進めます。しかしそれだけではありません。社会学研究室には大きく二種類のゼミがあります。まず週二回の合同ゼミです。このゼミにはそれぞれのゼミを担当する先生と社会学を専攻する院生が全員参加します。合同ゼミは自身が行う研究報告の場です。ゼミでのやり取りの内容は多岐にわたります。例えば報告者の興味関心、報告中で使われた言葉の意味、研究上の意義、今後どのように研究を進めるのか…などなど様々です。それぞれの院生はゼミを通して研究を進めるうえでのヒントをたくさん得ることができます。二つ目は各院生の指導教員が実施するゼミです。ここでは重要文献を講読し、研究の基礎力を養います。

もちろん社会学を専攻する院生が、社会学だけを探究しているわけではありません。人文学研究科には、専門的な議論のみならず広く人文学について考える様々な場が用意されています。各分野を横断する主題を扱った演習授業や、他大

渡邊 大樹 (芸術学)



後期
課程

私は写真、特に写真の行為性について研究しています。学士は学習院大学で取得しました。大学院の博士前期課程で初めて神戸大学に入学し、そのあと後期課程へと進学しました。後期課程は、前期課程とは異なり、卒業に必要な単位がほとんどありません（多少あります）。それに伴い生活がより研究中心になりました。ただ自分の研究だけを行っているという視野が狭くなってしまいます。そのため他の授業を聴講したり、共同研究室で同じゼミ生と話をしたり、自分以外の人間と話をすることを多少心がけています。前期課程のときより、大学で過ごす時間が増えたかもしません。そうした中で新しい発見があったり、ひらめきがあったりと、このような刺激が研究に影響を与えていると私は思います。

大学院で研究することの利点は、このように同じく研究している学生や先生が周りにいるという点です。授業に出ても面白い話が聞け、授業以外で話をしても面白い話が聞ける。面白いことだらけです。もう一つの利点は、やはり研究環境が整っている点でしょう。図書館には多くの本があり、貸出期間

大塚 優美 (美術史学)



後期
課程

私は学部生の頃から神戸大学に在籍しています。幼いころより、「古来人々はものを創ってきた」ということに関心があり、そうした文化財を扱う学芸員にあこがれてきました。そのため、美術史学をはじめ人文学の諸分野が充実している神戸大学へと進学しました。学部のころより継続して17世紀北イタリアの美術を勉強しており、博士前期課程では学校の制度を利用してボローニャ大学へ交換留学しました。やはり、研究対象である作品や史料に、じかに触れてみたかったのです。今思えばその頃から、学芸員として働くという直接的な目的よりも、美術史という学問そのものに魅せられていたのかもかもしれません。現地で作品をじっくり見ていると、複製図版ではわからない細かな部分まで実見することができ、大きな発見があります。またボローニャの地の風土も体感することができ、当時の美術が制作された背景を少なからず知ることができました。こうした留学経験を通じて、研究への意欲をさらに高め、博士後期課程へ進学するに至りました。美術史研究室は和気

私の場合は、所属するゼミに他の大学院生が居ないこともあり、学外の研究会で発表し、質問や指導をいただくことが研究の支えとなっています。また、他のゼミの演習は、自分1人では扱えないようなテキストや手法を用い、先輩方や同級生との気楽で刺激的な議論を通じて、私の視野を広げてくれます。学外の研究会も、他ゼミの演習も、正直わからないことの方が多いです。他の参加者の質問の面白さに驚き、自分の未熟さを実感しては頭を抱えることの繰り返しですが、そこには、1人で図書館に籠っているだけでは得られない面白さと楽しさがあります。

研究には案外体力が必要で、大学院生活は何かバタバタと忙しいです。当たり前ですが、思うようにいかないことも多いです。しかし、そこには周囲の人達と真面目に議論する楽しさと、自分の関心に向き合う面白さがあります。素敵な環境で過ごせることに感謝しつつ、とにかくできるところまでやってみようと思う毎日です。

学の院生との（時には国境を越えた）合同シンポジウムが開催されます。また分野を問わない院生同士での読書会が行われることもあります。分野間の風通しがよいのも人文学研究科の大きな特徴です。

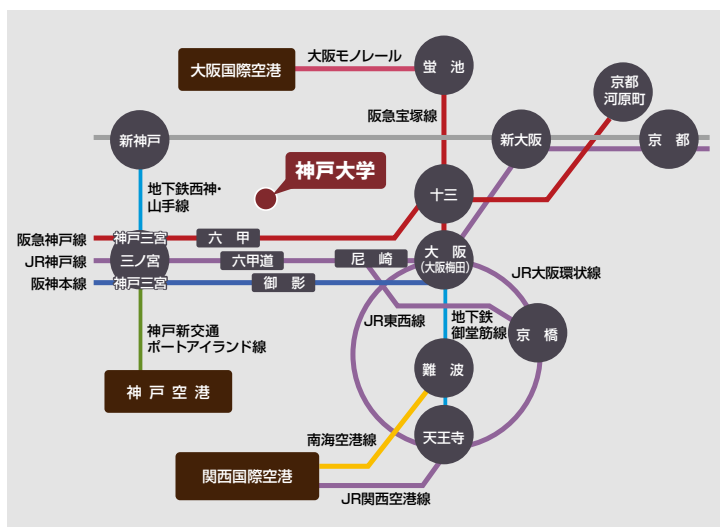
さて、こうした生活のなかで私自身が感じるのは「社交」の大切さです。社交と聞くと社交辞令のような型にはまったつまらないものを想起するかもしれませんが、しかしここで私が強調したいのは、社交には目の前の人物や場面への繊細な感覚が必要になるということです。この感覚は研究をしている人々のやり取り及びアカデリズムと市民社会との交流に重要なだけではありません。テキストや史料の一言一句やその表現技法に向かう際にも不可欠です。社交という言葉には「対話」や「コミュニケーション」という言葉からは導かれない何か―これは私自身が明らかにしたいものでもあります―を含んでいるようにも思います。私にとって人文学研究科は院生との、また各自の研究対象との社交の場であり、その力を涵養する場といえます。

も学部生に比べると長く、比較的自由を持って文献を調べることができます。また神戸大学人文学研究科には幅広い研究分野の研究室があり、自分の研究に間接的にかかわっている分野や関係が薄い分野の文献を（ある程度）自由に手に取ることができます。さらに総合大学であるため、いわゆる文系の私でも、理系の文献を調べることができます。自分の研究に直接的に関係している訳ではない分野の研究に触れることは、先に述べた自分以外の人間と話をすることと同様に、自分の研究に影響を与えるいい経験になると私は思います。

私が進学したのは、博士前期課程で行った研究が面白く、研究の余地があると思ったからです。しかし研究というのはそのようなものかもしません。研究をすればわからないことがすこしずつ明らかになる。ただその結果新たな問題や疑問があらわれる。知れば知るほど知らないことが出てくる。この魅力と、大学院での生活という面白さは、あまり味わうことのできないものだ、と近頃感じている私です。

あいあいとしており、様々な地域美術を専門とする学生が在籍していて、議論が絶えることがありません。研究といえ、ひとり熟考する姿を思い描きがちですが、他者との交流によってはじめて見えることも沢山あるのだと気づかされます。さらに、神戸大学の人文学研究科は、ひとつの場所に文学や社会学など多様な研究分野の研究室がぎゅっと集まっているため、学問領域さえ超えて、いろんな視点で物事を考えている人たちと出会えることも、魅力のひとつでしょう。こうした出会いは、柔軟な発想や広い視野を育てる良い機会となり、知的好奇心が刺激される毎日です。このような環境の下で研究に専念できることは、大変ありがたいことだと思います。

Access Map アクセスマップ



..... バス路線

最寄り駅から大学院人文学研究科まで

- 徒 歩：阪急「六甲」駅から約15分
 バ ス：神戸市バス36系統「鶴甲団地」「鶴甲2丁目止り」行き、または「鶴甲3丁目」行き乗車、
 阪神「御影」駅から約25分、JR「六甲道」駅から約15分、
 阪急「六甲」駅から約10分、「神大文理農学部前」下車
 タクシー：阪神「御影」駅から約20分／JR「六甲道」駅から約15分／阪急「六甲」駅から約10分



神戸大学大学院人文学研究科

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/>

● 問い合わせ先

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
 神戸大学人文学研究科教務学生係
 電話 078-803-5595
 Email: lkyomu@lit.kobe-u.ac.jp